

## 校異源氏物語・やとり木

その比ふちつほときこゆるはこ左大臣殿の女御になむおはしけるまた春宮と聞えさせし時人よりさきにまいり給にしかはむつましくあはれなるかたの御思ひはことにものし給めれとそのしるしとみゆるふしもなくてとしへ給ふに中宮にはみやたちさへあまたこゝらをとなひ給ふめるにさやうの事もすくなくてたゝ女宮ひとゝころをそもちたてまつり給へりけるわかいとくちおしく人におされたてまつりぬるすぐせなけしかしくおほゆるかはりにこの宮をたにいかてゆくすゑの心もなくさむはかりにてみたてまつらむとかしつき聞え給ふ事をろかならず御かたちもいとおかしくおはすれはみかともらうたきものにおもひきこえさせ給へり女一の宮をよにたくひなきものにかしつき聞えさせ給におほかたの世のおほえこそおよふへうもあらねうちくの御ありさまはおさくをとらすちゝおとゝの御いきほひいかめしかりしなこりいたくおとろへねはことに心もとなき事などなくてさふらふ人くのなりすかたよりはしめたゆみなく時くにつけつゝとゝのへこのみいまめかしくゆへくしきさまにもてなし給へり十四になり給ふとし御裳きせ奉りたまはんとて春よりうちはしめてこと事なくおほしいそきてなに事もなへてならぬさまにとおほしまうくいにしへよりつたはりたりけるたからものともこのおりにこそはとさかしいてつゝいみしくいとなみ給に女御なつころものゝけにわつらひ給ていとはかなくうせ給ぬいふかひなくくちおしき事をうちにもおほしなけく心はえなさけくしくなつかしきところおはしつる御かたなれは殿上人とももこよなくさうくしかるへきわさかなとおしみきこゆおほかたさるましききはの女官なとまてしのひきこえぬはなし宮はましてわかき御心ちに心ほそかなしくおほしいりたるをきこしめして心くるしくあはれにおほしめさるれば御四十九日するまゝにしのひてまいらせたてまつらせ給へり日々にわたらせ給つゝみたてまつらせ給くろき御そにやつれておはするさまいとゝらうたけにあてなるけしきまさり給へり心さまもいとよくおとなひ給て母女御よりもいますこしつしやかにおもりかなる所はまさりたまへるをうしろやすくはみたてまつらせ給へとまことには御はゝかたとてもうしろみとたのませ給へきをちなとやうのはかくしき人もなしわつかに大くら

卿すりのかみなといふは女御にもことはらなりけることに世のおほえをもちかにもあらずやんことなからぬ人くゝをたのもし人にておはせんに女は心くるしき事おほかりぬへきこそいとおしけれなと御心ひとつなるやうにおほしあつかふもやすからさりけり御まへのきくうつろひはてゝさかりなるころ空のけしきのあはれにうちしくるゝにもまつこの御かたにわたらせ給てむかしの事など聞えさせ給ふに御いらへなともおほとかなるものからいはけなからすうちきこえさせ給ふをうつくしくおもひ聞えさせ給かやうなる御さまをみしりぬへからん人のもてはやしきこえんもなとかはあらん朱雀院のひめ宮を六条院にゆつりきこえ給しおりのさためともなとおほしめしいつるにしはしいてやあかすもあるかなさらてもおはしなましときこゆる事ともありしかと源中納言の人よりことなるありさまにてかくよろづをうしろみたてまつるにこそそのかみの御おほえおとろへすやんことなきさまにてはなからへ給めれさらすは御心よりほかなる事ともゝいてきてをのつから人にかかるめられ給こともやあらましなとおほしつゝけてともかくも御覧する世にやおもひさためましとおほしよるにはやかてそのついでまゝにこの中納言よりほかによろしかるへき人又なかりけり宮たちの御かたはらにさしならへたらんに何事もめさましくはあらしをもとより思人もたたりて聞にくき事うちますましくはたあめるをつゐにはさやうの事なくてもえあらしさらぬさきにさもやほのめかしてましなとおひくおほしめしけり御こなとうたせ給ふくれゆくまゝにしくれおかしき程に花の色も夕はえしたるを御覧して人めしてたゝいま殿上にはたれくゝかとはせ給に中務のみこかんなつけのみこ中納言みなもとのあそんさふらふとそうす中納言のあそんこなたへとおほせ事ありてまいり給へりけにかくとりわきてめしいつるもかひありてとをくよりかほれるにほひよりはしめ人にことなるさまし給へりけふのしくれつねよりことにのとかなるをあそひなとすさましかたにていとつれくゝなるをいたつらに日を送るたはふれにてこれなんよかるへきとて暮はんめしいてゝ御暮のかたきにめしすいつもかやうにけちかくならしまつはし給ふにならひにたれはさにこそはとおもふによきのりものはありぬへけれとかるかるしくはえわたすましきを何をかはなどのたまはする御けしきいかゝみゆらんいとゝ心つかひしてさふらひ給さてうたせ給ふに三はんに数ひとつまけさせ給ひぬねたきわさかなとてまつけふはこの花ひとえたゆるすとのたまはすれは御いらへ聞えさせておりておもしろきえたをおりてまいり給へり

よのつねのかき根ににほふ花ならはこゝろのまゝにおりてみましをとそう

し給へるようゐあさからすみゆ

霜にあへすかれにしそのゝ菊なれとのこりの色はあせすもある哉との給は

すかやうにおりくほのめかさせ給御けしきを人つてならすうけ給りなかられ  
いの心のくせなれはいそかしくしもおほえすいてやほいにもあらすさまく  
いとおしき人くの御事ともをもよくきゝすくしつゝとしへぬるをいまさらに  
ひしりのものゝよにかへりいてん心ちすへき事と思ふもかつはあやしやことさ  
らに心をつくす人たにこそあなれとは思なからきさきはらにおはせはしもとお  
ほゆる心のうちそあまりおほけなかりけるかゝる事を右大殿ほの聞給て六の君  
はさりとこの君にこそはしふくなりともまめやかにうらみよらはついには  
えいなひはてしとおほしつるを思ひのほかの事いてきぬへかなりとねたくおほ  
されければ兵部卿の宮はたわさとはあらねとおりくにつけつゝおかしきさ  
まにきこえ給事なとたえさりければさはれなをさりのすきにはありともさるへ  
きにて御心とまるやうもなとかなからん水もるましく思さためんとでもなを  
くしききはにくたらんはたいと人わろくあかぬ心ちすへしなどおほしなりに  
たり女こうしろめたけなる世のすゑにてみかとたにむこもとめ給ふよにまして  
たゝ人のさかりすきんもあいなしなとそしらはしけにの給て中宮をもまめやか  
にうらみ申給事たひかさなれはきこしめしわつらひていとおしくかくおほな  
く思ひ心さしてとしへ給ひぬるをあやにくにのかれきこえ給はんもなさけな  
きやうならんみこたちは御うしろみからこそともかくもあれうへの御よもすゑ  
になり行とのみおほしの給めるをたゝ人こそひと事にさたまりぬれは又心をわ  
けんこともかたけなめれそれたにかのおとゝのまめたちなからこなたかなたう  
らやみなくもてなしてものし給はすやはあるましてこれは思ひをきてきこゆる  
事もかなはゝあまたもさふらはむになとかあらんなどれいならすことつゝけて  
あるへかしくきこえさせ給ふを我御心にももとよりもてはなれてはたおほさぬ  
事なれはあなちにはなとてかはあるましきさまにもきこえさせ給んたゝいと  
事うるはしけなるあたりにとりこめられて心やすくならひ給へるありさまの所  
せからん事をなまくるしくおほすにもものうきなれとけにこのおとゝにあまりゑ  
んせられはてんもあいなからんなどやうくおほしよはりにたるへしあたる  
御心なれはかのおせちの大納言のこうはいの御方をも猶おほしたえす花もみち  
につけてものゝ給ひわたりつゝいづれをもゆかしくはおほしけりされとそのと  
しはかはりぬ女二の宮も御ふくはてぬれはいとゝ何事にかはゝかり給んさもき  
こえてはとおほしめしたる御けしきなとつけきこゆる人くもあるをあまり

しらすかほならんもひかくしうなめけなりとおほしおこしてほのめかしまい  
らせ給おりくもあるにはしたなきやうはなとてかはあらんそのほにおほし  
さためたなりとつてにもきく身つから御けしきをもみれと心のうちにはなをあ  
かす過給にし人のかなしさのみわするへきよなくおほゆれはうたてかく契りふ  
かくものし給ける人のなとてかはさすかにうとくては過にけんと心えかたく思  
ひいてらるくちおしきしなゝりともかの御ありさまにすこしもおほえたらむ人  
はこゝろもとまりなんかしむかしありけんかうのけふりにつけてたにいま一た  
ひみたてまつる物にもかなとのみおほえてやむことなきかたさまにいつしかな  
といそくこゝろもなし右大殿にはいそきたちて八月はかりにときこえ給けり二  
条院のたいの御方にはきき給にされはよいかてかは数ならぬありさまなめれは  
かならず人わらへにうき事いてこんものそとは思ふくすこしつる世そかしあ  
たなる御心と聞わたりしをたのもしけなく思なからめにちかくてはことにつら  
けなることみえすあはれにふかき契りをのみし給へるをにはかにかはり給ん程  
いかゝはやすき心ちはすへからむたゝ人のなからひなどのやうにいとしもなこ  
りなくなとはあらすともいかにやすけなき事おほからんなをいとうき身なめれ  
はついには山すみに返へきなめりとおほすにもやかて跡たえなましよりは山か  
つのまちおもはんも人わらへなりかし返くも宮のゝ給をきしことにたかひてく  
さのもとをかれにける心かるさをはつかしくもつらくも思しり給こひめ君のい  
としとけなけに物はかなきさまにのみ何事もおほしの給しかと心のそのつし  
やかなるところはこよなくもおほしけるかな中納言の君のいまにわするへきよ  
なくなけきわたり給めれともしよにおはせましかは又かやうにおほすことはあ  
りもやせましそれをいとふかくいかてさはあらしと思いり給てとさまかうさま  
にもてはなれん事をおほしてかたちをもかへんとし給しそかしかならずさる  
さまにてそおはせましいま思にいかにをもりかなる御心をきてならましなき御  
かけともゝ我をはいかにこよなきあはつけさとみ給らんとはつかしくかなしく  
おほせとなにかはかひなきものからかゝるけしきをもみえたてまつらんとしの  
ひ返してきゝもいれぬさまにてすくし給ふ宮はつねよりもあはれになつかしく  
おきふしかたらひちきりつゝこのよならずなき事をのみそたのみきこえ給さ  
るは此さ月はかりよりれいならぬさまになやましくし給こともありけりこちた  
くくるしかりなどはし給はねとつねよりも物まいる事いとゝなくふしてのみお  
はするをまたさやうなる人のありさまよくもみしり給はねはたゝあつきころな  
れはかくおはするなめりとそおほしたるさすかにあやしとおほしとかむる事も

ありてもしいかなるそさる人こそかやうにはなやむなれなどの給ふおりもあれ  
といとはつかしくし給てさりけなくのみもてなし給へるをさし過聞え出る人も  
なければたしかにもえしり給はす八月になりぬれはその日なとほかよりそつた  
へき、給宮はへたてんにはあらねといひ出んほと心くるしくいとおしくおほ  
されてさもの給はぬを女君はそれさへ心うくおほえ給ふしのひたる事にもあら  
す世中なへてしりたることをその程なとたにの給はぬこと、いか、うらめしか  
とまる事はことにし給はすこ、かしこの御よかれなともなかりつるをにはかに  
いかに思給はんと心くるしきまきはしにこのころは時々御とのゑとてまいり  
なとし給つ、かねてよりならはしきこえ給ふをもた、つらきかたにのみそ思を  
かれ給ふへき中納言殿もいとくをしきわさかなとき、給ふはな心におはする  
宮なればあはれとはおほすともいまめかしきかたにかならず御心うつろひなん  
かし女かたもいとした、かなるわたりにてゆるひなくきこえまつはし給は、月  
ころもさもならひたまはてまつ夜おほくすこし給んこそあはれなるへけれなど  
思ひよるにつけてもあひなしや我心よなにしにゆつり聞えけんむかしの人に心  
をしめてしのちおほかたの世をも思ひはなれてすみはてたりしかたの心もにこ  
りそめにしかはた、かの御事をのみとさまかうさまには思なからさすかに人の  
心ゆるされてあらむことはしめより思ひしほいなるへしとは、かりつ、た  
ゝいかにしてすこしもあはれとおもはれてうちとけたまへらんけしきをもみん  
とゆくさきのあらましことのみ思つ、けしに人はおなし心にもあらずもてなし  
てさすかにひとかたにもえさしはなつましく思ひたまへるなくさめにおなし身  
そといひなしてほいならぬかたにおもむけ給ひしかねたくうらめしかりしかは  
まつその心をきてをたかへんといそきせしわさそかしなとあなかにめ、し  
くものくるおしくゑてありきたはかりきこえしほと思ひ出るもいとけしからさ  
りける心かなと返すくそくやしき宮もさりとその程のありさま思ひいて給  
は、我きかん所をもすこしは、はかり給はしやと思にいてやいまはそのおりの  
事などかけてもの給ひいてさめりかしなをあたなるかたにす、みうつりやすな  
る人は女のためのみにもあらずたのもしけなくかるくしき事もありぬへきな  
めりかしなとにく、思ひきこえ給わかまことにあまりひとかたにしみたる心な  
らひに人はいとこよなくもとかしくみゆるなるへしかの人をむなしくみなしき  
こえ給ふてしのち思にはみかとの御むすめをたまはんとおもほしをきつるもう  
れしくもあらずこの君をみましかはとおほゆる心の月日にそへてまざるもた、

かの御ゆかりと思におもひはなれかたきそかしはらからといふなかにもかきりなくおもひかはし給へりし物をいまはとなり給にしはてにもとまらん人をおなし事とおもへとてよろつはおもはすなる事もなしたゝかの思をきてしさまをかへ給へるのみなんくちおしううらめしきふしにてこの世には残るへきとの給しものをあまかけりてもかやうなるにつけてはいとゝつらしとやみ給覧なとつくくゝと人やりならぬひとりねし給ふよなくゝははかなき風の音にもめのみさめつゝきしかたゆくさき人のうへさへあちなき世を思ひめくらし給ふなけのすさひにものをもいひふれけちかくつかひならし給人くゝのなかにはをのつからにくからすおほさるゝもありぬへけれとまことには心とまるもなきこそさはやかなれさるはかの君たちの程にをとるましきゝはの人くゝも時よにしたかひつゝおとろへてこゝろほそけなるすまるなどをたつねとりつゝあらせなといとおほかれといまはと世をのかれそむきはなれん時この人こそとゝりたてゝこゝろとまるほたしになるはかりなる事はなくてすくしてんと思こゝろふかりしをいとさもわろくわかなからぬちけてもあるかななとつねよりもやかてまとろますあかし給へるあしたにきりのまかきより花の色くゝおもしろくみえわたれるなかにあさかほのはかなけにてましりたるを猶ことにめとまる心地し給あくるまさきてとかつねなきよにもなすらふるか心くるしきなめりかしかうしもあけなからいとかりそめにうちふしつゝのみあかし給へはこの花のひらくる程をもたゝひとりのみみ給ひける人めしてきたの院にまいらむにことくゝしからぬくるまさしいてさせよとの給へは宮はきのふよりうちになんおはしますなるよへ御車いてかへり侍りにきと申すさはれかのたいの御方のなやみ給なるとふらひきこえむけふはうちにまいるへき日なれば曰たけぬさきにとの給て御さうそくし給いて給ふまゝにおりて花のなかにましりたまへるさまことさらにえんたち色めきてもゝてなし給はねとあやしくたゝうちみるになまめかしくはつかしけにていみしくけしきたつ色このみともになすらふへくもあらずをのつからおかしくそみえ給けるあさかほひきよせ給へる露いたくこぼる

今朝のまの色にやめてんをく露のきえぬにかゝる花とみるくゝはかなとひとりこちておりてもたまへりをみなへしをはみすきてそいて給ぬる明はなるゝまゝにぎりたちみたる空おかしきに女とちはしとけなくあさいし給へらむかしかうしつまとうちたゝきこはつくらんこそうゑくゝしかるへけれあさまたきまたききにけりと思ひながら人めして中もんのあきたるよりみせ給へはみかうしともまいりて侍へし女はうの御けはひもし侍りつと申せはおりてきりのまきれ

にさまよくあゆみいり給へるを宮のしのひたる所より返給へるにやとみるに露にうちしめり給へるかほりれいのいとさまことに、ほひくれはなをめさましくはおはすかし心をあまりおさめ給へるそにくきなどあいなくわかき人くはきこえあへりおとろきかほにはあらずよきほどにうちそよめきて御しとねさしいてなどするさまもいとめやすしこれにさふらへとゆるさせ給ふほとは人くしき心ちすれと猶かゝるみすのまへにさはなたせ給へるうれはしきになんしはくもえさふらはぬとの給へはさらはいかゝ侍へからむなときこゆきたおもてなどやうのかくれそかしかゝるふる人などのさふらはんにことはりなるやすみ所はそれも又たゝ御心なれはうれへきこえへきにもあらずとてなけしによりかゝりておはすれはれいの人く猶あしこもとなとそゝのかしきこゆもとよりもけはひはやりかにをゝしくなどはものし給はぬ人からなるをいよくしめやかにもてなしおさめ給へはいまは身つからきこえ給事もやうくうたてつゝましかりしかたすこしつゝうすらきておもなれ給にたりなやましくおほさるらむさまもいかなれはなとゝひきこえ給へとはかくしくもいらへきこえ給はすつねよりもしめり給へるけしきの心くるしきもあはれにおほえ給てこまやかに世中のあるへきやうなどをはらからやうのものゝあらましやうにをしへなくさめきこえ給声などもわきと似給へりとおほえさりしかとあやしきまてたゝそれとのみおほゆるに人めみくるしかるましくはすたれもひきあけてさしむかひきこえまほしくうちなやみ給へらんかたちゆかしくおほえ給も猶世中に物おもはぬ人はえあるましきわさにやあらむと思しられ給人くしくきらくしきかたには侍らすとも心に思ふ事ありなけしかしく身をもてなやむさまになどはなくて過しつへきこのよと身つから思ひ給へし心からかなしき事もおこましくくやしきものおもひをもかたくゝにやすからす思ひ侍こそいとあいなれつかさくらあなといひてたいしにすめることはりのうれへにつけてなけき思ふ人よりもこれやいますこしつみのふかさはまさるらむなといひつゝおり給へる花をあふきにうちをきてみいたまへるにやうくあかみもて行もなかく色のあはひおかしくみゆれはやをらさしいれて

よそへてそみるへかりけるしら露のちきりかをきしあさかほの花ことさらひてしもてなさぬに露おとさてもたまへりけるよとおかしくみゆるにをきながらかるゝけしきなれは

きえぬまにかれぬる花のはかなさにをくるゝ露は猶そまされるなにゝかゝれるといとしのひてこともつゝかすつゝましけにいひけち給へる程なをいとよ

く似給へるものかなと思にもまつそかなしき秋の空はいますこしなかめのみま  
さり侍つれくまきはしにもとおもひてさいつ比うちにもものして侍き庭も  
まかきもまことにいと、あれはて、侍しにたへかたき事おほくなん故院のうせ  
給てのち二三年はかりのすゑに世をそむき給しさかのゐんにも六条院にもさし  
のそく人のこゝろおさめんかたなくなん侍りける本草の色につけても涙にくれ  
てのみなんかへり侍けるかの御あたりの人はかみしも心あさき人なくこそ侍り  
けれかたくつとひものせられける人くもみな所くあかれちりつ、をの  
く思ひはなるゝすまゐをし給めりしにはかなき程の女房などはたまして心お  
さめんかたなくおほえけるまゝにものおほえぬ心にまかせつゝ山はやしにいり  
ましりすゝろなるゐ中人になりなとあはれにまとひちるこそおほく侍れさて  
中くみなあらしはてわすれくさおふして後なんこの右のおとゝもわたりすみ  
宮たちなどもかたくものし給へはむかしに返たるやうにはへめるさるよにた  
くひなきかなしさとみ給しこともとし月ふれは思さますおりのいてくるにこそ  
はとみ侍にけにかきりあるわさなりけりとなんみえ侍かくはきこえさせなから  
もかのいにしへのかなしさはまたいはけなくも侍ける程にていとさしもしまぬ  
にやはへりけんなをこのちかき夢こそさますへきかたなく思給へらるゝはおな  
し事よのつねなきかなしひなれとつみふかきかたはまさりて侍るにやとそれさ  
へなん心うく侍とてなき給へる程いとこゝろふかけ也むかしの人をいとしも思  
ひきこえさらん人たにこの人のおもひ給へるけしきをみんなにはすゝろにたゝに  
もあるましきをましてわれも物をこゝろほそく思ひみたれ給につけてはいとゝ  
つねよりもおも影に恋しくかなしく思ひきこえ給心なれはいますこしもよをさ  
れてものもえきこえ給はすためらひかね給へるけはひをかたみにいとあはれと  
思ひかはし給ふのうきよりはなと人はいひしをもさやうに思ひくらふる心も  
ことになくてとしころはすくし侍りしをいまんなをいかてしつかなるさまに  
てもすくさまほしく思ふ給ふるをさすかに心にもかなはさめれは弁のあまこそ  
うらやましくはへれこの廿日あまりの程は彼ちかきてらのかねの声もきゝわた  
さまほしくおほえ侍をしのひてわたさせ給てんやときこえさせはやとなんおも  
ひ侍つるとの給へはあらさしとおほすともいかてかは心やすきをのこたにゆき  
ゝのほどあらましき山道にはへれは思ひつゝなん月日も隔り侍この宮の御き日  
はかのあさりにさるへき事ともみないひをき侍にきかしこはなをたうときかた  
におほしゆつりてよ時くみ給ふるにつけては心まとひのたえせぬもあいなき  
につみうしなふさまになしてはやとなん思給ふるをまたいかゝおほしをきつら



んともかくもさためさせ給んにしたかひてこそはとてなんあるへからむやうに  
の給はせよかしなに事もうとからすうけ給はらんのみこそほいのかなふにては  
侍らめなとめたちたる事共をきこえ給経仏などこのうへもくやうし給へきな  
めりかやうなるついでにことつけてやをらこもりぬなはやなとおもむけ給へる  
けしきなれはいとあるましき事也猶なにも心のかにおほしなせとをしへ  
きこえ給日さしあかりて人々まいりあつまりなとすればあまりなかるもこと  
ありかほならむによりていて給なんとていつこにてもみすのとはならひ侍ら  
ねは、したなき心ちし侍りてなんいま又かやうにもさふらはんとてたち給ぬ宮  
のなとかなきおりにはきつらんと思給ひぬへき御心なるもわつらはしくてさふ  
らひのへたうなる右京のかみめしてよへまかてさせ給ひぬとうけたまはりてま  
いりつるをまたしかりければくちおしきをうちにやまいるへきとの給へはけふ  
はまかてさせ給ひなんと申せはさらはゆふつかたもとていて給ひぬなをこの御  
けはひありさまをき、給たひことになとてむかしの人の御心をきてをもてたか  
へて思ひくまなかりけんとかゆるこ、ろのみまさりて心にかゝりたるもむつか  
しくなそや人やりならぬ心ならんと思返し給ふそのまゝにまたさうしにていと  
ゝたゝをこなひをのみし給ひつゝあかしくらし給は、宮のなをいともわかくお  
ほときてしとけなき御心にもかゝる御けしきをいとあやふくゆゝしとおほして  
いくよしもあらしをみてまつらむ程はなをかひあるさまにてみえ給へ世中を  
思すて給んをもちゝるかたちにてはさまたけきこゆへきにもあらぬをこの世の  
いふかひなき心ちすへき心まとひにいとゝつみやえんとおほゆるとの給ふかか  
たしけなくいとおしくてよろつを思ひけちつゝおまへにてはものおもひなきさ  
まをつくり給ふ右のおほい殿には六条院のひんかしのおとゝみかきしつらひて  
かきりなくよろつをとゝのへてまちきこえ給に十六日月やうくさしあかるま  
て心もとなければいとしも御心にいらぬ事にていかならんとやすからすおもほ  
してあないし給へはこのゆふつかたうちよりいて給て二条院になむおはします  
なると人申すおほす人もたまへれはと心やましけれとこよひすきんも人わらへ  
なるへければ御子の頭中将してきこえ給へり

おほ空の月たにやとるわかやとに待よひ過てみえぬきみかな宮は中くゝい  
まなんともみえし心くるしとおほして内におはしけるを御ふみきこえ給へりけ  
り御返やいかゝありけん猶いとあはれにおほされければしのひてわたり給へり  
ける也けりらうたけなるありさまをみすてゝいつへき心地もせずいとおしけれ  
はよろつに契りなくさめてもろともに月をなかれておはする程也けり女君はひ

ころもよろつに思事おほかれといかてけしきにいたさしとねんし返しつゝつれなくさまし給事なれはことにきゝもとゝめぬさまにおほとかにもてなしておはするけしきいと哀也中将のまいり給へるをきゝ給てさすかにかれもいとおしけれはいて給はんとていまいとゝくまいりこんひとり月なみたまひそ心そらなれはいとくるしきときこえをき給てなをかたはらいたければかくれのかたよりしん殿へわたり給御うしろてをみくるにともかくもおもはねとたゝ枕のうきぬへき心ちすれは心うき物は人の心也けりと我ながら思しらるおさなき程より心ほそくあはれなる身ともにて世の中を思ひとゝめたるさまにもおはせさりし人ひと所をたのみきこえさせてさる山里に年へしかといつとなくつれゝにすこくありなからいとかく心にしみて世をうきものとおもはさりしにうちつゝきあさましき御事ともを思し程はよに又とまりてかた時ふへくもおほえすこひしくかなしき事のたくひあらしと思しをいのちなかくていままでもなからふれは人の思ひたりし程よりは人にもなるやうなるありさまをなかゝるへき事とはおもはねとみるかきりはにくけなき御心はえもてなしなるにやうゝ思事うすらきてありつるをこのおりふしの身のうさはたいはんかたなくかきりとおほゆるわさなりけりひたすらよになく成給にし人ゝよりはさりともこれは時ゝもなとかはとも思ふへきをこよひかくみすてゝいて給つらさきしかたゆくさきみなかきみたり心ほそくいみしきか我心なから思ひやるかたなく心うくもあるかなをのつからなからへはなとなくさめんことを思ふにさらにをは捨山の月すみのほりて夜ふくるまゝによろつ思みたれ給ふ松風のふきくるをともあらましかりし山おろしに思ひくらふれはいのとかなになつかしくめやすき御すまゐなれとこよひはさもおほえすしるの葉のをとにはをとりておもほゆ

山さとのまつのかけにもかくはかり身にしむ秋の風はなかりきゝしかたわ

すれにけるにやあらむ老人ともなといまはいらせ給ね月みるはいみ侍るものをあさましはかなき御くた物をたに御覧しいれねはいかにならせ給んあなみくるしやゆゝしう思ひいてらるゝ事も侍をいとこそわりなくとうちなきていてこの御ことよさりとともかうておろかにはよも成はてさせ給はしさいへともとの心さしふかく思ひそめつるなかは名残なからぬ物そなといひあへるもさまゝにきゝゝにくゝいまはいかにもゝかけていはさらなむたゝにこそみめとおほさるゝは人にはいはせし我ひとりうらみきこえんとにやあらむいてや中納言とのゝさはかりあはれなる御心ふかさをなとそのかみの人ゝはいひあはせて人の御すくせのあやしかりける事よといひあへり宮はいと心くるしくおほしなから

今めかしき御こゝろはいかてめてたきさまにまちおもはれんところけさうしてえならすたきしめ給へる御けはひいはんかたなし待つけきこえ給へるところのありさまもいとおかしかりけり人の程さゝやかにあえかになとはあらてよき程になりあひたるこゝちし給へるをいかならむものくしくあさやきてこゝろはへもたをやかなるかたはなくものほりかになとやあらむさらはこそうたてあるへけれなどはおほせとさやなる御けはひにはあらぬにや御こゝろさしをろかなるへくもおほされさりけり秋のよなれとふけにしかはにや程なくあけぬかへり給ひてもたいへはふともえわたり給はすしはおほとのもりておきてそ御ふみかき給ふ御けしきけしうはあらぬなめりと御まへなる人くつきしろふたいの御かたこそ心くるしけれ天下にあまねき御こゝろなりともをのつからけおさるゝ事もありなんかしなとたゝにしもあらすみなゝれつかうまつりたる人くくなれはやすからすうちいふともゝありてすへてなをねたけなるわさにそありける御かへりもこなたにてこそはとおほせとよの程おほつかなさもつねのへたてよりはいかゝと心くるしけれはいそきわたり給ねくたれの御かたちとめてたく見所ありていり給へるにふしたるもうたてあれはすこしおきあかりておはするにうちあかみ給へるかほのにほひなとけさしもことにおかしきさまさりてみえ給にあいなくなみたくまれてしはしうちまもりきこえ給をはつかしくおほしてうつふし給へるかみのかゝりかんさしなと猶いとありかたけ也宮もなまはしたなきにこまやかなることなどはふともえいひ出給はぬおもかくしにやなとかくのみなやましけなる御けしきならむあつき程の事とかの給ひしかはいつしかと涼しきほと待いてたるもなをはれくしからぬはみくるしきわさかなさまくゝにせさすることもあやしくしるしなき心地こそすれさはあるともす法は又のへてこそはよからめしるしあらむそうもかななにかしそうつをそよゑにさふらはすへかりけるなどやうなるまめことをの給へはかゝるかたにもことよきは心つきなくおほえ給へとむけにいらへきこえさらむもれいならねは昔も人に似ぬありさまにてかやうなるおりはありしかとをのつからいとよくをこたるものをとの給へはいとよくこそさはやかなれとうちわらひてなつかしくあい行つきたるかたはこれにならふ人はあらしかしとは思ひなかなを又とくゆかしきかたの心いられもたちそひ給へるは御こゝろさしをろかにもあらぬなめりかしされとみ給ほとはかはるけちめもなきにやのちの世までちかひたのめ給事とものつきせぬをきくにつけてもけにこの世はみしかゝめるいのちまつまもつらき御心にみえぬへければのちの契りやたかはぬこともあらむと思にこそなをこ

りすまに又もたのまれぬへけれとていみしくねんすへかめれとえしのひあへぬ  
にやけふはなき給ぬひころもいかてかう思ひけりとみえたてまつらしとよろつ  
にまきはしつるをさまゝに思ひあつむることしおほかれはさのみもえもて  
かくされぬにやこほれそめてはえとみにもためらはぬをいとはつかしくわひし  
と思ていたくそむき給へはしゐてひきむけ給つゝきこゆるまゝに哀なる御あり  
さまとみつるをなを隔たる御心こそありけれなさらずはよのほにおほしかは  
りにたるかとて我御袖して涙をのこひ給へはよのまの心かはりこそその給ふにつ  
けてをしはかられ侍ぬれとてすこしほゝゑみぬけにあか君やをさなの御ものい  
ひやなさりとまことには心にくまのなけれはいと心やすいみしくことはりし  
てきこゆともいとしるかるへきわさをむけに世のことはりをしり給はぬこそら  
うたきものからわりなけれよしわか身になしても思ひめくらし給へ身を心とも  
せぬありさまなりもし思ふやうなる世もあらはひとにまさりける心さしの程し  
らせたてまつるへきひとふしなんあるたわやすくこといつへきことにもあらね  
はいのちのみこそなどの給ふ程にかしこにたてまつれ給へる御つかひいたくゑ  
ひすきにければすこしはゝかるへきことゝもわすれてけさやかにこのみなみお  
もてにまいれりあまのかるめつらしき玉もにかつきうつもれたるをさなめりと  
人ゝみるいつの程にいそきかき給へらんとみるもやすからすはありけんかし  
宮もあなちにかくすへきにはあらねとさしくみは猶いとおしきをすこしのよ  
うるはあれかしとかたはらいたけれといまはかひなければ女房して御ふみとり  
いれさせ給おなしくはへたてなきさまにもてなしはてゝむとおもほしてひきあ  
け給へるにまゝはゝの宮の御てなめりとみゆれはいますこし心やすくてうちを  
き給へりせんしかきにてもうしろめたのわさやさかしらはかたはらいたさにそ  
ゝのかしはへれといとなやましけにてなむ

をみなへししほれそまさるあさ露のいかにをきける名残なるらんあてやか  
におかしくかき給へりかことかましけなるもわつらはしやまことは心やすくて  
しはしはあらむと思ふよをおもひのほかにもあるかなゝとはの給へとまたふた  
つとなくてさるへき物におもひならひたるたゝ人のなかこそかやうなる事のう  
らめしさなどもみる人くるしくはあれ思へはこれはいとかたしつゐにかゝるへ  
き御事なり宮たちときこゆるなにもすちことによ人おもひ聞えたれはいくた  
りもゝえたまはん事もときあるましかければ人もこの御方いとおしなとも思  
ひたらぬなるへしかはかりものゝしくかしつきすゑ給てこゝろくるしきかた  
おろかならすおほしたるをそさいはいおはしけるとときこゆる身つからの心に

もあまりにならはし給うてにはかにはしたなかるへきかなけかしきなめりかゝる道をいかなればあさからす人の思らんとむかしものかたりなどをみるにも人のうへにてもあやしき、思ひしはけにおろかなるましきわさなりけりとわか身になりてそなに事も思ひしられ給ける宮はつねよりもあはれにうちとけたるさまにもてなし給てむけにものまいらさなるこそいとあしけれとてよしある御くた物めしよせ又さるへき人めしてことさらにてうせさせなとしつゝ、そのかしきこえたまへといとはるかにのみおほしたれはみくるしきわさかなとなけき聞え給にくれぬれはゆふつかたしむ殿へわたり給ぬ風すゝしくおほかたの空おかしき比なるにいまめかしきにすゝみ給へる御こゝろなれはいとゝしくえんなるにものおもはしき人の御心のうちはよろつにしのひかたき事のみそおほかりける日ぐらしのなく声に山のかけのみこひしくて

大かたにきかましものを日ぐらしの声うらめしき秋のくれ哉こよひはまた

ふけぬにいて給ふ也御さきの声のとをくなるまゝにあまもつりすはかりになるもわれなからにくき心かなと思ふゝきゝふし給へりはしめよりものおもはせ給しありさまなどを思ひいつるもうとましきまておほゆこのなやましきこともいかならんとすらむいみしく命みしかきそうなれはかやうならんついてもやとはかなくなりなむとす覽と思ふにはおしからねとかなしくもあり又いとつみふかくもあなるものをなとまろまれぬまゝに思ひあかし給ふその日はきさいの宮なやましけにおはしますとてたれもゝまいり給へれと御風におはしましければことなる事もおはしますとておとゝはひるまかて給にけり中納言の君さそひきこえ給てひとつ御車にてそいて給にけるこよひのきしきいかならんきよらをつくさんとおほすへかめれとかきりあらんかしこの君も心はつかしけれとしたしきかたのおほえはわかたさまに又さるへき人もおはせすものゝはえにせんに心ことにおはする人なれはなめりかしれいならすいそかくまて給て人のうへにみなしたるをくちおしとも思たらすなにかやともろ心にあつかひ給へるをおとゝは人しれすなまねたしとおほしけりよひすこし過る程におはしましたりしん殿のみなみのひさしひんかしによりておましまいれり御たるやつれの御さらなとうるはしけにきよらにてまたちいさきたいふたつに花そくの御さらなともいまめかくせさせ給てもちるまいらせたまへりめつらしからぬ事かきやくこそにくけれおとゝわたり給て夜いたうふけぬと女房してそゝのかし申給へといとあされてとみにもいてたまはす北の方の御はらからの左衛門督藤さい相なとはかりものし給からうしていて給へる御さまいとみるかひある心

ちすあるしの頭中将さか月さゝけて御たいまいるつきくの御かはらけふたゝ  
ひみたひまいり給中納言のいたくすゝめ給へるに宮すこしほをゑみ給へりわつ  
らはしきわたりをとふさはしからす思ていひしをおほしいつるなめりされとみ  
しらぬやうにていとまめなりひんかしのたいにいて給て御ともの人くもては  
やし給おほえある殿上人ともいとおほかり四位六人は女のさうそくにほそなか  
そへて五る十人はみへかさねのからきぬものこしもみなけちめあるへし六位四  
人はあやのほそなかはかまなとかつはかきりあることをあかすおほしければも  
のゝ色しさまなどをそきよらをつくし給へりけるめしつきとねりなどのなかに  
はみたりかはしきまていかめしくなんありけるけにかくにきはゝしく花やかな  
る事はみるかひあればものかたりなとにまついひたてたるにやあらむされとく  
はしくはえそかそへたてさりけるとや中納言殿の御せんのなかになまおほえあ  
さやかならぬやくらきまきれにたちまじりたりけんかへりてうちなきて我と  
のゝなどかおいらかにこの殿の御むこにうちならせ給ましきあちなき御ひと  
りすみなりやと中もんのもにてつふやきけるを聞つけ給ておかしとなんおほ  
しけるよのふけてねふたきにかのもてかしつかれつる人くは心ちよけにゑひ  
みたれてよりふしぬらんかしとうらやましきなめりかし君はいりてふし給ては  
したなけなるわさかなことくしけなるさましたるおやのいてゐてはなれぬな  
からひなれとこれかれひあかくかゝけてすゝめきこゆるさか月などをいとめや  
すくもてなし給めりつるかなと宮の御ありさまをめやすく思ひいてたてまつり  
給けにわれにてもよしとおもふをんなこもたらましかはこの宮をゝきたてまつ  
りてうちにたにえまいらせさらましと思ふにたれもく宮にたてまつらんと心  
さし給へるむすめはなを源中納言にこそとりくにいひならふなるこそ我お  
ほえのくちおしくはあらぬなめりなさるはいとあまりよつかすふるめきたるも  
のをなと心おこりせらるうちの御けしきあることまことにおほしたゝむにかく  
のみ物うくおほえはいかゝすへからんおもたゝしきことにはありともいかゝは  
あらむいかにそこきみにいとよく似給へらん時にうれしからむかしと思ひよら  
るゝはさすかにもてはなるましき心なめりかしのねさめかちなるつれく  
なれはあせちの君とて人よりはすこし思ひまし給へるかつほねにおはしてその  
よはあかし給つあけすきたらむを人のとかむへきにもあらぬにくるしけにいそ  
きおき給をたゝならす思ふへかめり

うちわたしよにゆるしなきせきかはをみなれそめけん名こそおしけれいと  
おしければ

ふかゝらすうへはみゆれとせきかはのしたのかよひはたゆる物かはふかし  
との給はんにてたにたのもしけなきをこのうへのあさゝはいとゝこゝろやまし  
くおほゆらむかしつま戸をしあけてまことはこのそらみ給へいかてかこれをし  
らすかほにてはあかさんとよえんなる人まねにてはあらていとゝあかしかたく  
なり行よなくのねさめにはこの世かのよまてなむ思ひやられてあはれなるな  
といひまきはしてそいて給ことにおかしき事の数をつくさねとさまのなまめ  
かしきみなしにやあらむなさけなくとは人におもはれ給はすかりそめのたは  
ふれことをもいひそめ給へる人のけちかくてみたてまつらはやとのみ思きこゆ  
るにやあなちによをそむき給へる宮の御方にえんをたつねつゝまいりあつま  
りてさふらふもあはれなる事程くにつけつゝおほかるへし宮は女君の御あり  
さまひるみきこえ給にいとゝ御心さしまさりけりおほきさよき程なる人のやう  
たいいときよけにてかみのさかりはかしらつきなとそもものよりことにあなめて  
たとみえ給ける色あひあまりなるまてにほひてものくしくけたかきかほのま  
みいとはつかしけにらうくしくすへて何事もたらひてかたちよき人といはむ  
にあかぬところなし廿にひとつふたつそあまり給へりけるいはけなき程ならね  
はかたなりにあかぬ所なくあさやかにさかりの花とみえ給へりかきりなくもて  
かしつき給へるにかたほならすけにおやにては心もまとはし給つへかりけりた  
ゝやはらかにあい行つきらうたき事そかのための御かたはまつおもほし出られ  
けるものゝ給いらへなともはちらひたれと又あまりおほつかなくはあらずすへ  
ていと見所おほくかとくしけ也よきわか人とも卅人はかりわらは六人かたほ  
なるなくさうそくなともれいのうるはしきことはめなれておほさるへかめれは  
ひきたかへ心得ぬまてそのみそし給へる三条殿はらの大君を春宮にまいらせ  
給へるよりもこの御事をはことに思ひをきてきこえ給へるも宮の御おほえあり  
さまからなめりかくて後二条の院にえ心やすくわたり給はすかるらかなる御身  
ならねはおほすまゝにひるの程なともえて給はねはやかておなしみなみのま  
ちにとしころありしやうにおはしましてくるれは又えひきよきてもわたり給は  
すなどしてまちとをなるおりくあるをかゝらんとすることゝは思ひしかとさ  
しあたりてはいとかくやはなこりなかるへきけに心あらむ人は数ならぬ身をし  
らてましらふへき世にもあらさりけりとかへすくも山ちわけいてけんほう  
つゝともおほえすくやしくかなしければ猶いかてしのひてわたりなむむけにそ  
むくさまにはあらずともしはし心をもなくさめはやくけにもてなしなとせは  
こそうたてもあらめなとこゝろひとつに思ひあまりてはつかしけれと中納言と

のにふみたてまつれ給一日の御事をはあさりのつたへたりしにくはしくき、侍にきかゝる御心のなこりなからましかはいかにいとおしくと思給へらるゝにもをろかならすのみなんさりぬへくは身つからもときこえ給へりみちのくにかみにひきつくろはすまめたちかき給へるしもいとおかしけ也宮の御き日にれいのことともいとうとくせさせ給へりけるをよろこひ給へるさまのおとろくしくはあらねとけに思ひしり給へるなめりかしいはこれよりたてまつる御返をたにつゝましけにおもほしてはかくしくもつゝけ給はぬを身つからとさへのたまへるかめつらしくうれしきに心ときめきもしぬへし宮のいまめかしくこのみたち給へる程にておほしをこたりけるもけに心くるしくおしはからるれはいとあはれにておかしやかなる事もなき御ふみをうちもをかすひき返しゝみる給へり御かへりはうけ給りぬ一日はひしりたちたるさまにてことさらにしのひはへしもさ思ひたまふるやう侍ころほひにてなんなこりとの給はせたるこそすこしあさく成にたるやうにとうらめしく思ふたまへらるれよろつはさふらひてなんあなかしことすくよかにしろきしきのこはくしきにてありさて又の日のゆふつかたそわたり給へる人しれす思ふ心しそひたれはあいなく心つかいいたくせられてなよゝかなる御そともをいとゝにほはしそへ給へるはあまりおとろおとろしきまてあるに丁しそめのあふきのもてならし給へるうつりかなとさへたとへんかたなくめてたし女君もあやしかりしよのことなと思ひて給折くなきにしもあらねはまめやかにあはれなる御心はへの人にゝすものし給ふをみるにつけてもさてあらましをとばかりは思やし給覧いはけなき程にしおはせねはうらめしき人の御ありさまをおもひくらふるには何事もいとゝこよなく思ひしられ給にやつねにへたておほかるもいとおしくもの思ひしらぬさまに思ひ給ふらむなど思ひ給てけふはみすのうちにいれたてまつり給てもやのすたれにき丁そへて我はすこしひきいりてたいめんし給へりわさとめしと侍らさりしかとれいならすゆるさせ給へりしよろこひにすなはちもまいらまほしく侍りしを宮わたらせ給ふとうけたまはりしかはおしやくやはとてけふになし侍にけるさるはとし比のこゝろのしるしもやうくあらはれ侍にやへたてすこしうすらき侍にけるみすのうちよめつらしく侍るわさかなとの給ふになをいとはつかしくいひいてんこと葉もなき心ちすれと一日うれしくきゝ侍し心のうちをれいのたゝむすほゝれなからすくし侍なは思しるかたはしをたにいかてかはとくちおしさにといとつゝましけにの給かいたくしそきてたえくほのかにきこゆれは心もとなくていと遠くも侍かなまめやかにきこえさせうけたまはらまほしき世の御も



のかたりも侍るものをとの給へはけにとおほしてすこしひろきより給けはひをきゝ給にもふとむねうちつふるれとさりけなくいとゝしつめたるさまして宮の御こゝろはへおもはすにあさうおはしけりとおほしくかつはいひもうとめまたなくさめもかたゝにしつゝときこえ給ひつゝおはす女君は人の御うらめしさなどとはうちいてかたらひきこえ給ふへきことにもあらねはたゝ世やはうきなどやうにおもはせてことすくなにまきはしつゝ山さとにあらさまにわたし給へとおほしくいとねんころに思ての給それはしもこゝろひとつにまかせてはえつかうまつるましきことに侍り猶宮にたゝ心うつくしくきこえさせ給て彼御けしきにしたかひてなんよく侍るへきさらすはすこしもたかひめありて心かろくもなとおほしものせんにいとあしく侍なんさたにあるましくは道の程も御をくりむかへもおりたちてつかうまつらんなにのはゝかりかは侍らむうしろやすく人に似ぬ心のほとは宮もみなしらせ給へりなどはいひなからおりゝはすきにしかたのくやしさをわするゝおりなくものにもかなやとゝりかへさまほしきとほのめかしつゝやうやうくらくなりゆくまでおはするにいとうるさくおほえてさらは心ちもなやましくのみ侍を又よろしく思給へられん程に何事もとていり給ぬるけしきなるかいとくちおしければさてもいつはかりおほしたつへきにかいとしけくはへしみちの草もすこしうちはらはせ侍らんかしと心とりきこえ給へはしはしいりさしてこの月はすきぬめれはついたちの程にもとこそは思侍れたゝいとしのひてこそよからめなにかよのゆるしなとことゝしくとの給声のいみしくらうたけなるかなとつねよりもむかし思いてらるゝにえつゝみあへてよりゐ給へるはしらもとのすたれのしたよりやをらをよひて御そてをとらへつ女さりやあな心うと思になに事かはいはれんものもいはていとゝひきいり給へはそれにつきていとなれかほになからはうちにいりてそひふし給へりあらずやしのひてはよかるへくおほすこともありけるかうれしきはひかみゝかきこえさせんとそうとゝしくおほすへきにもあらぬを心うのけしきやとらみ給へはいらへすへき心ちもせず思はすにくゝ思なりぬるをせめておもひしつめて思ひのほかなりける御心の程かな人の思らんことよあさましとあはめてなきぬへきけしきなるすこしはことほりなれはとおしけれとこれはとかあるはかりの事かはかばかりのたいめんはいにしへをもおほしいてよかしすきにし人の御ゆるしもありし物をいとこよなくおほしけるこそ中ゝうたてあれすきゝしくめさましき心はあらしと心やすくおもほせとていとのとやかにはもてなし給へれと月比くやしとおもひわたる心のうちのくるしきまてなりゆくさま

をつくくといひつゝけ給てゆるすへきけしきにもあらぬにせんかたなくいみ  
しともよのつね也中くむけに心しらさん人よりもはつかしく心つきなくて  
なき給ぬるをこはなそあなわかくしとはいひなからいひしらすらうたけに心  
くるしきものからようぬふかくはつかしけなるけはひなどのみし程よりもこよ  
なくねひまさり給にけるなとをみるに心からよそ人にしなしてかくやすからす  
ものを思ふ事とくやしきにも又けにねはなかれけりちかくさふらふ女房ふたり  
はかりあれとすゝろなるおとこのうちいきたるならばこそはいかなるこ  
ととてもまいりよらめうとからすきこえかはし給御ながらひなめれはさるやう  
こそはあらめと思にかたはらいたけれはしらすかほにてやをらしそきぬるにい  
とおしきやおとこ君はいにしへをくゆる心のしのひかたさなともいとしつめか  
たかりぬへかめれとむかしたにありかたかりし心のよいなれはなをと思ひ  
のまゝにもてなしきこえ給はさりけりかやうのすちはこまかにもえなんまね  
ひつゝけさりけるかいなき物から人めのあいなきを思へはよろつにおもひかへ  
していて給ぬまたよひと思ひつれとあか月ちかうなりにけるをみとかむる人も  
やあらんとわつらはしきも女の御ためのいとおしきそかしなやましけにきゝわ  
たる御心ちはことほなりけりいとはつかしとおほしたりつるこしのしるしに  
おほくは心くるしくおほえてやみぬるかなれいのおこかましのこゝろやと思へ  
となさけなからむ事はなをいとはいなかるへし又たちまちの我心のみたれにま  
かせてあなかなる心をつかひてのち心やすくしもはあらさらむものからわり  
なくしのひありかん程も心つくしに女のかたくおほしみたれん事よなどさか  
しく思にせかれすいまのまもこひしきそわりなかりけるさらにみてはえあるま  
しくおほえ給もかへすくあやにくなるこゝろなりやむかしよりはすこしほそ  
やきてあてにらうたかりつるけはひなどはたちはなれたりともおほえす身にそ  
ひたる心ちしてさらにことくもおほえすなりにたりうちにいとわたらまほし  
けにおほいためるをさもやわたしきこえてましなと思へとまさに宮はゆるし給  
てんやさりとて忍ひてはたいとひんなからむいかさまにしてかは人めみくるし  
からて思ふ心のゆくへきと心もあくかれてなかめふし給へりまたいとふかきあ  
したに御ふみありれいのはへはけさやかなるたてふみにて

いたつらにわけつる道の露しけみむかしおほゆる秋の空哉御けしきの心う

さはことほりしらぬつらさのみなん聞えさせむ方なくとあり御返しなからむも  
人のれいならずとみとかむへきをいとくるしければうけ給りぬいとなやましく  
てえ聞えさせずとはかりかきつけ給へるをあまりことすくなゝるかなとさう

く／＼しておかしかりつる御けはひのみこひしく思ひいてらすこしよのなか  
をもしり給へるけにやさはかりあさましくわりなしとはおもひ給へりつるもの  
からひたふるにいふせくなとはあらていとらう／＼しくはつかしけなるけしき  
もそひてさすかになつかしくいひこしらへなとしていたし給へる程の心はへな  
とを思ひ出るもねたくなしくさま／＼に心にかゝりてわひしくおほゆ何事も  
いにしへにはいとおほくまさりて思出らるなにかはこの宮かれはて給ひなはわ  
れをたのもし人にし給ふへきにこそはあめれさてもあらはれて心やすきさまに  
えあらしをしのひつゝ又おもひます人なき心のとまりにてこそはあらめなとた  
ゝこの事のみつとおほゆるそけしからぬ心なるやさはかりこゝろふかけにさか  
しかり給へとおとこといふものゝ心うかりける事よなき人の御かなしさはいふ  
かひなき事にていとかくるしきまてはなかりけりこれはよろつにそおもひめ  
くらされ給ひけるけふは宮わたらせ給ぬなと人のいふをきくにもうしろみの心  
はうせてむねうちつふれていとうらやましくおほゆ宮はひころに成にけるは我  
心さへうらめしくおほされてにはかにわたり給へるなりけりなにかは心へたて  
たるさまにもみえたてまつらし山さにと思たつにもたのもし人に思ふひとも  
うとましき心そひ給へりけりとみ給に世中いと所せくおもひなられて猶いとう  
き身也けりとたゝきえせぬほとはあるにまかせておひらかならんとおもひはて  
ゝいとらうたけにうつくしきさまにもてなしてゐ給へれはいとゝあはれにうれ  
しくおほされて日比のおこたりなとかきりなくの給ふ御はらもすこしふくらか  
になりたるにかのはち給しるしのおひのひきゆはれたるほとなといとあはれ  
にまたかゝる人をちかくてもみ給はさりければめつらしくさへおほしたりうち  
とけぬ所にならひ給てよろつのこと心やすくなつかしくおほさるゝまゝにおろ  
かならぬ事ともをつきせすちきりのたまふをきくにつけてもかくのみことよき  
わさにやあらむとあなちなりつる人の御けしきもおもひいてられてとし比あ  
はれなる心はへなとは思わたりつれとかゝるかたさまにてはあれもあるまし  
きことゝ思ふにその御ゆくさきのたのめはいてやと思ひながらもすこしみゝ  
とまりけるさてもあさましくたゆめ／＼ていきたりしほとよむかしの人にう  
とくてすきにし事なとかたり給し心はへはけにありかたかりけりと猶うちとく  
へくはたあらさりけりかしなといよ／＼心つかひせらるゝにもひさしくとたえ  
給んことはいとものおそろしかるへくおほえたまへはことにてゝはいはねと  
すきぬるかたよりはすこしまつはしさまにもてなし給へるを宮はいとゝかきり  
なくあはれとおもほしたるにかの人の御うつり香のいとふかくしみ給へるかよ

のつねのかうのかにいたきしめたるにもにすしるき匂ひなるをそのみちの人にしおはすれはあやしと、かめいて給ていかなりしことそとけしきとり給にことのほかにもてはなれぬ事にしあればいはんかたなくわりなくていとくるしとおほしたるをされはよからすすることはありなんよまた、にはおもはしと思ひわたる事そかしと御心さはきけりさるはひとへの御そなともぬきかへ給てけれとあやしく心よりほかにそ身にしみにけるかはかりにてはのこりありてしもあらしとよろつにき、にく、の給つ、くるに心うくて身そをき所なきおもひきこゆるさまことなるものをわれこそさきになとかやうにうちそむきは、ことにこそあれ又御心をき給はかりの程やはへぬる思ひのほかによりける御心かなとすへてまねふへくもあらすいとおしけにきこえ給へとともかくもいらへ給はぬさへいとねたくて

また人になれける袖のうつりかをわか身にしめてうらみつる哉女はあさま

しくの給ひつ、くるにいふへきかたもなきをいか、はとて

みなれぬる中の中もとたのめしをかはかりにてやかけはなれなんとてうちなき給へるけしきのかきりなくあはれなるをみるにもか、れはそかしといと心やましくてわれもほろ／＼とこほし給そいろめかしき御心なるやまことにいみしきあやまちありともひたふるにはえそうとみはつましくらうたけに心くるしきさまのし給へれはえもうらみはて給はすの給ひさしつ、かつはこしらへきこえ給又の日も心のとかにおほとのもりおきて御てうつ御かゆなともこなたにまいらす御しつらひなともさはかりか、やくはかりこまもろこしのにしきあやをたちかさねたるめうつしにはよのつねにうちなれたる心地して人／＼のすかたもなえはみたるうちましりなどとしていとしつかにみまはさるきみはなよ、かなるうす色ともになてしこのほそなかかさねてうちみたれ給へる御さまの何事もいとうるはしくこと／＼しきまでさかりなる人の御よそひなにくれに思くらふれとけをとりてもおほえすなつかしくおかしきも心さしのをろかならぬにはちなきなめりかしまろにうつくしくこえたりし人のすこしほそやきたるに色はいよく／＼しろくなりてあてにおかしけ也か、る御うつり香などのいちしるからぬおりたにあい行つきらうたき所などのなを人におほくまさりておほさるゝまゝ、にはこれをはらからなどにはあらぬ人のけちかくいひかよひてことにふれつ、をのつから声けはひをもき、みなれんはいかてかた、にもおもはんかならすしかおほしぬへきことなるをとわかいとくまなき御心ならひにおほししるれはつねに心をかけてしるきさまなるふみなとやあるとちかきみつしこから

ひつなとやうのものをささりけなくてさかし給へとさるものもなしたゝいとすくよかにことすくなにてなをくしきなとそわさともなければものにとりませなどとしてもあるをあやし猶いとかうのみはあらしかしとうたかはるゝにいと、けふはやすからすおほさるゝ事わりなりかしかの人のけしきも心あらむ女のあはれと思ぬへきをなとてかは事のほかにさはしはなたんいとよきあはひなれはかたみにそ思ひかはすらむかしと思やるそわひしくはらたゝしくねたかりけるなをいとやすからさりければその日もえいて給はす六条院には御ふみをそふたゝひ三たひたてまつり給ふをいつのほとにつもる御ことの葉ならんとつふやくおひ人ともあり中納言のきみはかく宮のこもりおはするをきくにしも心やましくおほゆれとわりなしやこれは我心のおこましくあしきそかしうしろやすくとおもひそめてしあたりのことをかくは思へしやとしゑてそ思ひかへしてさはいへとえおほしすてさめりかしとうれしくもあり人くのけはひなどのなつかしき程になえはみためりしをと思ひやり給てはゝ宮の御方にまいり給てよろしきまうけの物ともやさふらふつかうへきことなと申給へはれいのたゝむ月のほうしのれうにしろき物ともやあらむそめたるなどはいまはわさともしをかぬをいそきてこそせさせめとの給へはなにかことくしきようにも侍らすさふらはんにしたかひてとてみくしけとのなにとはせ給て女のさうそくともあまたくたりにほそなかともゝたゝあるにしたかひてたゝなるきぬあやなどゝりくし給みつからの御れうとおほしきには我御れうにありけるくれなるのうちめなへてならぬにしろきあやともなとあまたかさね給へるにはかまのくはなかりけるにいかにしたりけるにかこしのひとつあるをひきむすひくはへて

むすひける契ことなるしたひもをたゝひとすちにうらみやはするたいふの

君とておとなしき人のむつまじけなるにつかはすとりあへぬさまのみくるしきをつきつきしくもてかくしてなどの給て御れうのはしのひやかなれとはこにてつゝみもことなり御覽せさせねとさきくもかやうなる御心しらひはつねのことにてめなれにたれはけしきはみかへしなとひこしろふへきにもあらねはいかゝとも思わつらはて人くにとりちらしなとしたれはをのくさしぬひなどすわかき人くの御まへちかくつかうまつるなどをそとりわきてはつくろひたつへきしもつかへとものだくなえはみたりつるすかたともなとにしろきあはせなどにてけちえんならぬそ中くめやすかりけるたれかは何事をもうしろみかしつききこゆる人のあらむ宮はをろかならぬ御心さしの程にてよろつをいかてとおほしをきてたれとこまかなるうちくの事まてはいかゝはおほしよらむか

きりもなく人にのみかしつかれてならはせ給へれば世の中うちあはすきしきこといかなるものとしり給はぬことはりなりえんにそゝろさむくはなの露をもてあそひてよはすくすへきものとおほしたるほとよりはおほすひとのためなれはをのつからおりふしにつけつゝまめやかなる事までもあつかひしらせ給こそありかたくめつらかなることなめれはいてやなとそしらはしけにきこゆる御めのとなともありけりわらはへなどのなりあさやかならぬおりくうちましりなとしたるをも女君はいとはつかしく中くなるすまゐにもあるかなゝと人しれすはおほす事なきにしもあらぬにましてこのころはよにひゝきたる御ありさまのはなやかさにかつは宮のうちの人のみ思はんことも人けなきことゝおほしみたるゝこともそひてなけかしきを中納言の君はいとよくおしはかり聞え給へはうとからむあたりにはみくるしくくたくしくしかりぬへき心しらひのさまもあなつるとはなけれとなにかはことくしくしたてかほならむも中くおほえなくみとかむる人やあらんとおほすなりけりいまそ又れいのめやすきさまなるものともなとせさせ給て御こうちきをらせあやのれうたまはせなとし給けるこの君しもそ宮にをとりきこえたまはすさまことにかしつきたてられてかたはなるまで心おこりもしよを思すましてあてなる心はへはこよなければとこみこの御山すみをみそめ給しよりそさひしき所のあはれさはさまことなりけりと心くるしくおほされてなへての世をも思ひめくらしふかなさけをもならひ給にけるいとおしの人ならはしやとそかくてなをいかてうしろやすくおとなしき人にてやみなんと思ふにもしたかはす心にかゝりてくるしければ御ふみなどをありしよりはこまやかにてともすれはしのひあまりたるけしきみせつゝきこえ給を女君いとわひしき事をひたる身とおほしなけるひとへにしらぬ人ならばあなものくるおしとはしたなめさしはなたんにもやすかるへきをむかしよりさまことなるたのもし人にならひきて今さらになかあしくならむも中く人めあしかるへしさすかにあさはかにもあらぬ御心はへありさまのあはれをしらぬにはあらずさりとて心かはしかほにあひしらはんもいとつゝましくいかゝはすへからむとよろつにおもひみたれ給さふらふ人くもすこしものゝいふかひありぬへくわかやかなるはみなあたらしみなれたるとではかの山さとのふる女はら也思ふ心をもおなし心になつかしくいひあはすへき人のなきまゝにはこひめきみを思いて聞え給はぬおりなしおはせましかはこの人もかゝる心をそへ給はましやといとかなしく宮のつらくなり給はんなきよりもこの事いとくるしくおほゆおとこ君もしゐて思ひわひてれいのしめやかなるゆふつかたおはしたりやかてはし

に御しとねさしいてさせ給ていとなやましきほとにてなんえきこえさせぬと人  
してきこえいたし給へるをきくにいみしくつらくてなみたおちぬへきを人めに  
つゝめはしゐてまきはしてなやませ給おりはしらぬそうなともちかくまいり  
よるをくすしなどのつらにてもみすのうちにはさふらふましくやはかく人つて  
なる御せうそこなむかひなき心ちするとの給ていとのしけなる御けしきなる  
をひとよものゝけしきみし人くけにいとみくるしく侍めりとてもやのみすう  
ちおろしてよひのそうのさにいれたてまつるを女君まことに心ちもいとくるし  
けれど人のかくいふにけちえんにならむも又いかゝとつゝましければものうな  
からすこしゐさりいてゝたいめんし給へりいとほのかに時く物の給ふ御けは  
ひのむかし人のなやみそめ給へりし比まつ思出らるゝもゆゝしくかなしくてか  
きくらす心ちし給へはとみにものみはれすためらひてそきこえ給こよなくお  
くまり給へるもいとつらくてすのしたよりき丁をすこしおしいれてれいのなれ  
くしけにちかつきより給かいとくるしければわりなしとおほして少将といひ  
し人をちかくよひよせてむねなんいたきしはしおさへてとの給ふを聞てむね  
おさへたるはいとくるしく侍る物をとうちなけきてゐなをり給ほともけにそし  
たやすからぬいかなれはかくしもつねになやましくはおほさるらむ人にとひ侍  
しかはしはしこそ心ちはあしかなれさて又よろしきおりありなとこそをしへは  
へしかあまりわかくしくもてなさせ給なめりとの給にいとつかしくてむね  
はいつともなくかくこそは侍れむかしの人もさこそはものし給しかなかゝるま  
しき人のするわさとか人もいひ侍めるとその給ふけにたれもちとせのまつなら  
ぬよをと思ふにはいと心くるしくあはれなれはこのめしよせたる人のきかんと  
つゝまれすかたはらいたきすちのことをこそえりとゝむれ昔より思ひきこえし  
さまなどをかの御みゝひとつには心えさせなから人はかたわにもきくましきさ  
まにさまよくめやすくそいひなし給をけにありかたき御心はへにもときゝあた  
りけり何事につけてもこ君の御事をそつきせず思ひ給へるいはけなかりし程よ  
り世中をおもひはなれてやみぬへきこゝろつかひをのみならひはへしにさるへ  
きにや侍けんうときものからをろかならすおもひそめきこえ侍しひとふしにか  
のほいのひしり心はさすかにたかひやしにけんなくさめはかりにこゝにもかし  
こにもゆきかゝつらひて人のありさまをみんなにつけてまきるゝこともやあらん  
なと思ひよるおりく侍れとさらにほかさまにはなひくへくもはへらさりけり  
よろつに思給わひては心のひくかたのつよからぬわさなりければすきかましき  
やうにおほさるらむとはつかしけれとあるましき心のかけてもあるへくはこそ

めさましからめたゝかはかりのほとにてとき／＼思ふ事をもきこえさせうけた  
まはりなとしてへたてなくの給かよはむを誰かはとかめいつへきよの人にゝぬ  
心の程はみな人にもとかるましくはへるを猶うしろやすくおほしたれなとうら  
みみなきこえ給うしろめたく思ひきこえはかくあやしと人もみおもひぬへ  
きまてはきこえ侍るへくやとしころこなたかなたにつけつゝみしる事どもの侍  
しかはこそさまことなるたのもし人にていまはこれよりなとおとろかしきこゆ  
れとの給へはさやうなるおりもおほえはへらぬものをいとかしこきことにおほ  
しをきてのたまはするやこの御山さといてたちいそきからうしてめしつかは  
せ給へきそれもけに御覽ししるかたありてこそはとをろかにやは思ひ侍などの  
給てなをいともものうらめしけなれときく人あれは思ふまゝにもいかてかはつゝ  
け給はんのかたをなかめいたしたれはやう／＼くらくなりにたるにむしの声  
はかりまきれなくて山のかたをくらくなにのあやめもみえぬにいとしめやかな  
るさましてよりぬ給へるもわつらはしとのみうちにはおほさるかきりたにある  
なと忍ひやかにうちすむして思ふたまへわひにて侍りをとなしのさともとめま  
ほしきをかの山さとのわたりにわさとてらなとはなくともむかしおほゆる人か  
たをもつくりゑにもかきとりてをこなひ侍らむとなん思ふ給へなりにたるとの  
給へはあはれなる御ねかひに又うたてみたらしかはちかき心地する人かたこそ  
思ひやりいとおしくはへれこかねもとむるゑしもこそなとうしろめたくそ侍や  
との給へはそよそのたくみもゑしもいかてか心にはかなふへきわさならんちか  
き世に花ふらせたるたくみも侍りけるをさやうならむへ化の人もかなとどさま  
かうさまに忘んかたなきよしをなけき給ふけしきの心ふかけなるもいとおしく  
ていますこしちかくすへりよりて人かたのついでにいとあやしく思ひよるまし  
き事をこそ思ひいてはへれとの給ふけはひのすこしなつかしきもいとうれしく  
あはれにて何事にかといふまゝにき丁のしたよりてをとらふれはいとうるさく  
思ひならるれといかさまにしかゝる心をやめてなたらかにあらんとおもへは  
このちかき人のおもはんことのあいなくてさりけなくもてなし給へりとし比は  
よにやあらむともしらさりつる人のこのなつころとをき所よりものして尋いて  
たりしをうとくは思ましかれと又うちつけにさしもなにかはむつひ思はんと思  
侍しをさいつ比きたりしこそあやしきまてむかし人の御けはひにかよひたりし  
かはあはれにおほえなりにしかゝたみなとかうおほしの給めるは中／＼何事も  
あさましくもてはなれたりとなんみる人／＼もいひ侍しをいとさしもあるまし  
きひとのいかてかはさはありけんとの給をゆめかたりかとまてきくさるへきゆ



へあれはこそはさやうにもむつひきこえらるらめなどか今までかくもかすめさ  
せ給はさらんとの給へはいさやそのゆへもいかなりけん事とも思ひわかれ侍ら  
すものはかなきありさまとてよにおちとまりさすらへんとすらむことゝの  
みうしろめたけにおほしたりし事ともをたゝひとりかきあつめて思ひしられ侍  
に又あいなきことをさへうちそへて人もきゝつたへんこそいとくおしかるへ  
けれとの給けしきみるに宮のしのひてもなどの給ひけん人のしのふくさつみ  
をきたりけるなるへしとみしりぬにたりとの給ゆかりにみゝとまりてかはかり  
にてはおなしくはいひはてさせ給うてよといふかしかり給へとさすかにかたは  
らいたくてえこまかにもきこえ給はす尋んとおほす心あらはそのわたりとは聞  
えつへけれとくはしくしもえしらすや又あまりいはゝ心をとりもしぬへき事に  
なんとの給へはよをうみなかにもたまのありか尋ねには心のかきりすゝみぬへ  
きをいとさまで思ふへきにはあらさなれといとかくなくさめんかたなきよりは  
と思ひより侍ひとかたのねかひはかりにはなとかは山さとの本そんにも思はへ  
らさらんなをたしかにの給はせよとうちつけにせめきこえ給いさやいにしへの  
御ゆるしもなかりしことをかくまでもらしきこゆるもいとくちかるけれとへ化  
のたくみもとめ給いとおしさにこそかくもとていとをき所にとし比へにける  
をはゝなる人のうれはしきことに思ひてあなかに尋よりしをはしたなくもえ  
いらへてはへりしにものしたりし也ほのかなりしかはにやなに事も思し程より  
はみくるしからすなんみえしこれをいかさまにもてなさむとなけくめりしにほ  
とけにならんはいとこよなきことにこそはあらめさまではいかてかはなときこ  
え給さりけなくてかくうるさき心をいかていひはなつわさもかなと思ひ給へる  
とみるはつらけれとさすかにあはれもあるましき事とはふかく思ひ給へるもの  
からけせうにはしたなきさまにはえもてなし給はぬもみしり給へるにこそはと  
思ふ心ときめきによもいたくふけゆくをうちには人めいとかたはらいたくおほ  
え給てうちたゆめていり給ぬれはおとこ君ことはりとは返くおもへとなをい  
とうらめしくゝちおしきに思ひしつめんかたもなき心地して涙のこほるゝも人  
わろければよろつに思ひみたるれとひたふるにあさはかならむもてなしはたな  
をいとうたて我ためもあいなかるへければねんし返してつねよりもなけきかち  
にていて給ぬかくのみ思ひてはいかゝすへからむくるしくもあるへきかないか  
にしてかはおほかたのよにはもときあるましきさまにてさすかに思ふ心のかな  
ふわさをすへからむなとおりたちてれむしたる心ならねはにや我ため人のため  
も心やすかるましき事をわりなくおほしあかすに似たりとの給つる人もいかて

かはまことかとはみるへきさはかりのきはなれは思ひよらんにかたくはあらすとも人のほいにもあらすはうるさくこそあるへけれなどをそなたさまには心もたゝすうちの宮をひさしくみ給はぬ時はいとゝむかしとをくなる心ちしてすゝろに心ほそければ九月廿日はかりにおはしたりいとゝしく風のみふきはらひて心すこくあらましけなる水のをとのみやとりにて人かけもことにみえすみるにはまつかきくらしかなしき事そかきりなき弁のあまめしいてたればさうしくちにあをにひのき丁寧しいてゝまいれりとかしこけれとましていとおそろしけに侍れはつゝましくてなむとまほにはいてこすいかなかめ給らんとおもひやるにおなし心なる人もなきものかたりもきこえんとてなんはかなくもつもととし月かなとて涙をひとめうけておはするに老ひとはいとゝさらにせきあへす人のうへにてあいなくものをおほすめりしころの空そかしと思給へいつるにいつと侍らぬなるにも秋の風は身にしみてつらくおほえ侍てけにかのなかせ給めりしもしるき世の中の御ありさまをほのかにうけたまはるもさまゝになんときこゆれはとある事もかゝることもなからふれはなほるやうもあるをあちきなくおほししみけんこそ我あやまちのやうになをかなしけれこの比の御ありさまはなにかそれこそよのつねなれされとしろめたけにはみえきこえさめりいひてもゝむなしき空にのほりぬるけふりのみこそたれものかれぬ事なからをくれさきたつとは猶いといふかひなかりけりとても又なき給ぬあさりめしてれいのかのき日の経仏などの事の給さてこゝに時ゝものするにつけてもかいなきことのやすからすおほゆるかいとやくなきをこのしん殿こほちてかの山てらのかたはらにたうたてむとなん思ふをおなしくはとくはしめてんどの給てたういくつらうともそうほうなどあるへき事ともかきいての給せさせ給ふをいとたうときことゝ聞えしらすむかしの人のゆへある御すまゐにしめつくり給けん所をひきこほたんなさけなきやうなれとその御心さしもくどくのかたにはすゝみぬへくおほしけんをとまり給んひとゝおほしやりてえさはをきて給はさりけるにやいまは兵部卿の宮のきたのかたこそはしり給へければかの宮の御りやうともいひつへくなりたりされはこゝなからてらになさんことはひんなるへし心にまかせてさもえせし所のさまもあまりかはつらちかくけせうにもあらはなをしん殿をうしなひてことさまにもつくりかへんの心にてなんとの給へはとさまかうさまにいかしこくたうとき御心なりむかしわかれをかなしひてかはねをつゝみてあまたのとしくひにかけて侍ける人も仏の御はうへんにてなんかのかはねのふくろをすてゝつゐにひしりのみちにもいり侍にけるこのし

ん殿を御覧するにつけて御心うきおはしますらんひとつにはたいくしき事なり又後の世のすゝめともなるへきことに侍けりいそぎつかうまつるへしこよみのはかせはからひ申て侍らむ日をうけ給りてものゝゆへしりたらんたくみ三人をたまはりてこまかなる事ともは仏の御をしへのまゝにつかうまつらせ侍らむと申とかくの給さためてみさうの人ともめしてこのほのことゝもあさりのいはんまゝにすへきよしなとおほせ給はかなく暮ぬれはその夜はとまり給ぬこのたひはかりこそみめとおほしてたちめくりつゝみ給へは仏もみな彼てらにうつしてければあま君のをこなひの具のみありいとはかなけにすまひたるをあらはれにいかにしてすくすらんとみ給このしんてんはかへてつくるへきやうありつくりいてん程はかのらうにももし給へ京の宮にとりわたさるへきものなどあらはさうの人めしてあるへからむやうにももし給へなとまめやかなる事ともをかたらひ給ほかにてはかはかりにさた過なん人を何かとみいれ給へきにもあらねとよるもちかくふせてむかしものかたりなとせさせ給故権大納言の君の御ありさまもきく人なきに心やすくていとこまやかにきこゆいまはとなり給しほとにめつらしくおはしますらん御ありさまをいふかしきものに思きこえさせ給めりし御けしきなどのおもひ給へ出らるゝにかくおもひかけ侍らぬよのすゑにくくてみたてまつり侍なんかの御よにむつましくつかうまつりをきししるしのをつから侍けるとうれしくもかなしくも思ひ給へられはへる心うき命の程にてさまゝの事をみ給へすくし思ひ給へしり侍るなんいとはつかしくこゝろうくはへる宮よりも時くはまいりてみたてまつれおほつかなくたえこもりはてぬるはこなくおもひへたてけるなめりなどの給はするおりく侍れとゆゝしき身にてなんあみた仏よりほかにはみたてまつらまほしき人もなくなりて侍なときこゆこひめ君の御事ともはたつきせずとし比の御ありさまなどかたりてなにのおりなにとの給し花紅葉の色をみてもはかなくよみ給けるうたかたりなどをつきながらすうちわなゝきたれとこめかしくことすくなゝるものからおかしかりける人の御心はえかなとのみいとゝきゝそへ給宮の御方はいますこしいまめかしきものから心ゆるさゝらん人のためにはゝしたなくもてなし給ひつへくこそものし給めるをわれにはいとこゝろふかくなさけくしとはみえていかてすこしてんとこそ思ひ給へれなと心のうちに思ひくらへ給さてもものゝついてにかのかたしろのことをいひいて給へり京にこのころ侍らんとはえしり侍らす人つてにうけ給りし事のすちなゝりこ宮のまたかゝる山さとすみもし給はす故きたのかたのうせ給へりける程ちかゝりける比中将の君とてさふらひける上らうの

心はせなともけしうはあらさりけるをいと忍ひてはかなき程に物の給はせける  
しる人も侍らさりけるに女をなんうみて侍けるをさもやあらんとおほす事の  
ありけるからにあいなくわつらはしくものしきやうにおほしなりて又とも御覽  
しいるゝこともなかりけりあいなくそのことにおほしこりてやかておほかたひ  
しりにならせ給ひにけるをはしたなく思ひてえさふらはすなりにけるかみちの  
国のかみのめになりたりけるをひとゝせのほりてそのきみたいらかにものし給  
ふよしこのわたりにもほのめかし申たりけるをきこしめしつけてさらにかゝる  
せうそこあるへきことにもあらずとのたまはせはなちければかひなくてなんな  
けき侍りけるさて又ひたちになりてくたりはへりにけるかこのとし比をとにも  
聞え給はさりつるか此春のほりてかの宮には尋ねまいたりけるとなんほのか  
にきゝ侍しかの君のとしはゝたちはかりになり給ぬらんかしいとうつくしくお  
いいて給ふかなしきなどゝそなか比はふみにさへかきつゝけてはへめりしか  
ときこゆくはしくきゝあきらめ給てさらはまことにてもあらんかしみはやと思  
ふこゝろいてきぬむかしの御けはひにかけてもふれたらんは人はしらぬ国まで  
も尋しらまほしき心あるをかすまへ給はさりけれとちかき人にこそはあなれわ  
さとはなくともこの渡りにをとなふおりあらむついてにかくなんいひしとつた  
へ給へなどはかりの給をく母君は故北の方の御めいなり弁もはなれぬ中らひに  
侍へきをそのかみはほかゝに侍りてくはしくもみ給へなれさりきさいつ比京  
よりたいふかもとより申たりしはかのきみなんいかてかの御はかにたにまいら  
んとの給ふなるさる心よせなと侍しかとまたこゝにさしはへてはをとなはずは  
へめりいまさらはさやのついでにかゝるおほせなとつたへ侍らむときこゆあけ  
ぬれはかへり給はんとてよへをくれてもてまいるきぬわたなどやうのものあ  
さりにをくらせ給あま君にもたまふほうしはらあま君のけすものれうにとて  
ぬのなといふものをさへめしてたふ心ほそきすまゐなれとかゝる御とふらひた  
ゆまさりければ身のほとにはめやすくしめやかにてなんをこなひけるこからし  
のたへかたきまでふきとをしたるに残るこすゑもなくちりしきたるもみちをふ  
みわけゝる跡もみえぬをみわたしてとみにもえいて給はすいとけしきあるみ山  
きにやとりたるつたの色をまたのこりたるこたになとすこしひきとらせ給て宮  
へとおほしくてもたせ給

やとりきと思ひいてすはこのもとのたひねもいかにさひしからましとひと

りこち給をきゝてあまきみ

あれはつるくちきのもとをやとりきと思ひをきける程のかなしさあくまで

ふるめきたれとゆへなくはあらぬをそいさゝかのなくさめにはおほしける宮にもみちたてまつれたまへれはおとこみやおはしましけるほとなりけりみなみの宮よりとて何心もなくもてまいりたるを女君れいのむつかしきこともこそとくるしくおほせととりかくさんやは宮おかしきつたかなとたゝならすの給てめしよせてみ給ふ御ふみにはひころなに事かおはしますらむ山さともものし侍りていとゝみねのあさきりにまとひ侍つる御ものかたりも身つからなかしこのしん殿たうになすへき事あさりにいひつけ侍にき御ゆるし侍りてこそはほかにうつすこともものしはへらめ弁のあまにさるへきおほせ事はつかはせなとそあるよくもつれなくかき給へるふみかなまろありとそきゝつらむとの給もすこしはけにさやありつらん女君は事なきをうれしと思給ふにあなちにかくの給ふをわりなしとおほしてうちゑんしてゐ給える御さまよろつのつみゆるしつへくおかしかへりことかき給へみしやとてほかさまにむき給へりあまえてかゝさらむもあやしければ山さとの御ありきのうらやましくも侍るかなかしこはけにさやにてこそよくと思ひ給へしをことさらに又いはほのなかもとめんよりはあらしはつましく思ひ侍をいかにもさるへきさまになさせ給はゝおろかならすなんときこえ給かくにくきけしきもなき御むつひなめりとみ給ながら我御心ならひにたゝならしとおほすかやすからぬなるへしかれゝなるせんさいのなかにおはなのものよりことにてゝをさしいてまねくかおかしくみゆるにまたほにいてさしたるも露をつらぬきとむる玉のをはかなけにうちなひきたるなとれいのことなれとゆふかせ猶あはれなる比なりかし

ほにいてぬもの思ふらしゝのすゝきまねくたもとの露しけくしてなつかしきほどの御そともになおしはかりき給てひわをひきゐ給へりわうしきてうのかきあはせをいとあはれにひきなし給へは女君も心にいり給へることにてものえんしもえしはてたまはすちいさきみき丁のつまよりけうそくによりかゝりてほのかにさしいて給へるいとみまほしくらうたけなり

秋はつる野辺のけしきものすゝきほのめく風につけてこそしれわか身ひとつのとなみたくまるゝかさすかにはつかしければあふきをまきはしておはする御心のうちもらうたくをしはからるれとかゝるにこそ人もえ思ひはなたさらめとうたかはしきかたゝならてうらめしきなめり菊のまたよくうつろひはてゝわさとつくるひたてさせ給へるはなかゝをそきにいかなるひとにもかあらむいと見所ありてうつろひたるをとりわきておらせ給て花のなかにひとへにとすし給てなにかしのみこの花めてたるゆふへそかしいにしへ天人のかけり

てひわの手をしへけるは何事もあさく成にたる世はものうしやとて御ことさし  
をき給ふをくちおしとおほして心こそあさくもあらめむかしをつたへたらむこ  
とさへはなとてかさしもとおほつかなくてなをゆかしけにおほしたればさ  
らはひとりことはさうくしきにさしいらへし給へかしとて人めしてさうの御  
こととりよせさせてひかせたてまつり給へとむかしこそまねふ人ものし給し  
かはかくしくひきもとめすなりにしものをとつゝましけにて手もふれ給はね  
はかはかりの事もへたて給へるこそ心うけれこの比みるわたりまたいと心と  
くへきほとにもあらねとかたなるうゑることをもかくさすこそあれすへて  
女はやはらかに心うつくしきなんよきことゝこそ其中納言もさたむめりしか  
かのきみにはたかくもつゝみ給はしこよなき御中なめれはなとまめやかにうら  
みられてそ打なきてすこししらへ給ふゆるひたりければゝんしきてうにあは  
せ給かきあはせなとつまをとけおかしけにきこゆいせのうみうたひ給ふ御声の  
あてにおかしきを女はうもものゝうしろにちかつきまいりてゑみひろこりてゑ  
たりふた心おはしますはつられとそれもことはりなれはなをわかおまへをは  
さいはひ人ところそは申さめかゝる御ありさまにましらひ給へくもあらさりし所  
の御すまるを又かへりなまほしけにおほしての給はするこそいと心うけれな  
とたゝいひにいへはわかき人くはあなかまやなとせいす御ことゝもをしへた  
てまつりなとして三四日こもりおはして御ものいみなとことつけ給をかとの  
にはうらめしくおほしておとゝうちよりいて給けるまゝにこゝにまいり給へれ  
は宮ことくしけなるさましてなにしましつるそとよとむつかり給へとあ  
なたにわたり給てたいめんし給ふことなる事なきほとはこのゑんをみて久しく  
なり侍るもあはれにこそなとむかしの御ものかたりともすこしきこえ給てやか  
てひきつれきこえ給ていて給ぬ御こともののはらさらぬかたちめ殿上人な  
ともいとおほくひきつゝき給へるいきほひこちたきをみるにならふへくもあら  
ぬそくしいたかりけるひとくゝのそきてみだてまつりてさもきよらにおはしけ  
るおとゝかなさはかりいつれとなくわかくさかりにてきよけにおはさうする御  
こともの似給ふへきもなかりけりあなめてたやといふもあり又さはかりやむこ  
となけなる御さまにてわさとむかへにまいり給へるこそにくけれやすけなの世  
の中やなとうちなけくもあるへし御みつかからもきし方を思ひいつるよりはしめ  
かの花やかなる御なからひにたちましかへくもあらずかすかなる身のおほえを  
といよく心ほそければなをこゝろやすくこもりゑなんのみこそめやすからめ  
なといとゝおほえ給はかなくてとしもくれぬ正月つこもりかたよりれいならぬ

さまになやみ給を宮また御覽ししらぬことにていかならむとおほしなきてみ  
すほうなど所くにてあまたせさせ給に又くはしめそへさせ給いといたくわ  
つらひ給へはきさいの宮よりも御とふらひありかくてみとせになりぬれとひと  
所の御心さしこそをろかならねおほかたのよにはものくしくももてなしきこ  
え給はさりつるをこのおりそいつこにもく聞え給ける中納言君は宮のおほ  
しさはくにをとらすいかにをはせんとなけて心くるしくうしろめたくおほ  
さるれとかきりある御とふらひばかりこそあれあまりもえまかてたまはてし  
のひてそ御いのりなともせさせ給けるさるは女二の宮の御もき只このころに  
なりて世中ひきいとなみのしるよろつのことみかとの御心ひとつなるや  
うにおほしいそけは御うしろみなきしもそ中くめてたけにみえける女御の  
しをき給へることをはさるものにてつくも所さるへきすらうともなとりく  
につかうまつること、もいとかきりなしや、かてその程にまいりそめ給へき  
やうにありければおとこかたも心つかひし給比なれとれいのことなれはそな  
たさまには心もいらてこの御事のみいとおしくなけかるきさらきのついたち  
ころになおしものとかいふことに権大納言になり給て右大将かけ給つ右のお  
ほいとひたりにておほしけるかし、給へる所なりけりよろこひに所くあ  
りき給てこの宮にもまいりたまへりいとくるしくし給へはこなたにおはしま  
す程なりければやかてまいり給へりそうなどさふらひてひんなきかたとお  
とろき給てあさやかなる御なをし御したかさねなとたてまつりひきつくるひ  
給ておりてたうのはいし給御さまもとりくにとめてたくやかてつかさ  
のろく給ふあるしの所にとさうしたてまつりたまふをなやみ給人によりてそ  
おほしたゆたひ給める右大臣殿のし給ひけるまゝにとて六条の院にてなんあ  
りけるゑんかのみこたちかたちめたいきやうにをとらすあまりさはかしき  
まてなんつとひ給けるこの宮もわたり給てしつ心なければまた事はてぬにい  
そきかへり給ぬるを大殿の御かたにはいとあかすめさましの給をとるへくも  
あらぬ御程なるをたゝいまのおほえの花やかさにおほしをこりてをしたちもて  
なし給へるなめりかしからうしてそのあか月おとこにてむまれ給へるを宮も  
いとかひありてうれしくおほしたり大将殿もよろこひにそへてうれしくおほす  
よへおはしましたりしかしこまりにやかてこの御よろこひも打そへてたちなか  
らまいり給へりかくこもりおはしませはまいり給はぬ人なし御うふやしなひ三  
日はれいのたゝ宮の御わたくしことにて五日のよ大将殿よりとしき五十く五  
てのせにわうはんなどはよのつねのやうにてこもちの御まへのつかさね三十

ちこの御そいつへかさねにて御むつきなとそこくしからすしのひやかにし  
なし給へれとこまかにみればわさとめなれぬ心はえなとみえける宮のおまへに  
もせんかうのおしきたかつきともにてふすくまいらせ給へり女はうの御まへに  
はつかさねをはさるものにてひわりこ三十さまくしつくしたることゝもあ  
り人めにことくしくはことさらにしなし給はす七日の夜はきさいの宮の御う  
ふやしなひなれはまいり給人くいとおほかり宮のたいふをはしめて殿上人か  
むたちめ数しらすまいり給へりうちにもきこしめして宮のはしめてをとなひ給  
なるにはいかてかとの給はせて御はかしたてまつらせ給へり九日もおほい殿よ  
りつかうまつらせたまへりよろしからすおほすあたりなれと宮のおほさん所あ  
れは御このきんたちなとまいり給てすへていと思事なけにめてたければ御身つ  
からも月比ものおもはしく心ちのなやましきにつけても心ほそくおほしたりつ  
るにかくおもたゝしくいまめかしき事とものおほかれはすこしなくさみもやし  
給らむ大將殿はかくさへをとなひはてたまふめはいとゝわかかたさまはけと  
をくやならむ又宮の御心さしもいとをろかならしと思ふはくちおしけれと又は  
しめよりの心をきてを思にはいとうれしくもありかくてその月の廿日あまりに  
そふちつほの宮の御もきのことありて又の日なん大將まいり給ひけるよのこと  
はしのひたるさまなりあめのしたひゝきていつくしうみえつる御かしつきにた  
ゝ人のくしたてまつり給そ猶あかす心くるしくみゆるさる御ゆるしはありな  
かもたゝいまかくいそかせ給ましきことそかしとそしらはしけにおもひの給ふ  
人もありけれとおほしたちぬる事すかくしくおはします御心にてきしかた  
めしなきまておなしくはもてなさんとおほしをきつるなめりみかとの御むこに  
なる人はむかしもいまもおほかれとかくさかりの御よにたゝ人のやうにむこと  
りいそかせ給へるたくひはすくなくやありけん右のおとゝもめつらしかりける  
人の御おほえすくせなりこ院たに朱雀院の御すゑにならせ給ていまはとやつし  
給しきはにこそかのゝ宮をえたてまつり給しかわれはまして人もゆるさぬも  
のをひろひたりしやとの給いつれば宮はけにとおほすにはつかしくて御いらへ  
もえし給はす三日のよは大蔵卿よりはしめてかの御方の心よせになさせ給へる  
人くけいしにおほせ事給てしのひやかなれとかのこせんすいしんくるまそひ  
とねりまてろく給はすその程のことゝもはわたくしことのやうにそありけるか  
くてのちはしのひくまにまいり給ふ心のうちにはなをわすれかたきいにしへさ  
まのみおほえてひるはさとおきふしなかくめくらししてくるれは心よりほかに  
いそきまいり給をもならはぬ心ちにいとものうくゝるしくてまかてさせたてまつ



らむとそおほしをきてけるは、宮はいとうれしき事におほしたりおはしますし  
ん殿ゆつりきこゆへくの給へといとかたしけなからむとて御ねんすたうのあは  
ひにらうをつゝけてつくらせ給にしおもてにうつろひ給へきなめりひんかしの  
たいともなともやけてのちうるはしくあたらしくあらまほしきをいよくみか  
きそへつゝこまかにしつらはせ給かゝる御心つかひをうちにもきかせ給てほと  
なくうちとけうつろひ給はんをいかゝとおほしたり御門ときこゆれと心のやみ  
はおなしことなんおはしましけるは、宮の御もとに御つかひありける御ふみに  
もたゝこのことをなむきこえさせ給ける故朱雀院のとりわきてこのあま宮の御  
事をはきこえをかせ給しかはかく世をそむき給へれとおとろへすなに事もとの  
のまゝにてそうせさせ給事などはかならずきこしめしいれ御よういふかかりけ  
りかくやむことなき御心ともにかたみにかきりもなくもてかしつきさはかれ給  
おもたゝしさもいかなるにかあらむ心のうちにはことにうれしくもおほえす猶  
ともすれはうちなかめつゝうちのてらつくることをいそかせ給ふ宮のわかきみ  
のいかになり給日かそへとりてそのもちゐのいそきを心にいれてこものひわり  
こなとまでみいれ給つゝよのつねのなへてにはあらずとおほし心さしてちんし  
たんしろかねこかねなど道くのさいくともいとおほくめしさふらはせ給へは  
われをとらしとさまくのこゝもをしいつめり身つからもれいの宮のおはし  
まさぬひまにおはしたり心のなしにやあらむいますこしをもくしくやむこと  
なけるけしきさへそひにけりとみゆいまはさりともむつかしかりしすゝろ事  
などはまきれ給にたらんと思に心やすくてたいめんし給へりされとありしなか  
らのけしきにまつなみたくみて心にもあらぬましらひいと思ひのほかなるもの  
にこそとよを思給へみたるゝ事なんまさりにたるとあいたちなくそうれへ給いと  
あさましき御ことかな人もこそをのつからほのかにももりきゝ侍れなどは  
給へとかはかりめてたけなる事ともなくさますすれかたく思ひ給覧心ふ  
かさよとあはれに思きこえ給にをろかにもあらず思しられ給おはせましかはと  
くちおしくおもひいてきこえ給へとそれもわかありさまのやうにうらやみな  
く身をうらむへかりけるかしなに事も数ならてはよの人めかしき事もあるまし  
かりけりとおほゆるにそいとゝかのうちとけはてゝやみなんと思給へりし心お  
きては猶いとをもくしく思出られ給わか君をせちにゆかしかりきこえ給へは  
はつかしけれとなにかはへたてかほにもあらむわりなき事ひとつにつけてうら  
みらるゝよりほかにはいかてこの人の御心にたかはしと思へは身つからはとも  
かくもいらへきこえたまはてめのとしてさしいてさせ給へりさらなる事なれば

にくけならんやはゆゝしきましてろくうつくしてたかやかにものかたりしう  
ちわらひなとし給かほをみるにわかものにてみまほしくうらやましきもよの思  
はなれかたくなりぬるにやあらむされといふかひなくなり給にし人のよのつね  
のありさまにてかやうならむ人をもとゝめをき給へらましかはとのみおほえて  
この比おもたゝしけなる御あたりにいつしかなとは思われぬこそあまりすへ  
なき君の御心なめれかくめゝしくねちけてまねひなすこそいとおしけれしかわ  
ろひかたほならん人をみかとのとりわきせちにちかつてむつひ給へきにもあ  
らし物をまことしきかたさまの御心をきてなとこそはめやすくものし給けめと  
そをしはかるへきけにいとかくをさなき程をみせ給へるもあはれなれはれいよ  
りはものかたりなとこまやかにきこえ給ふ程にくれぬれは心やすくよをたにふ  
かすましきをくるしうおほゆれはなけくゝいて給ぬおかし人の御にほひや  
おりつれはとかやいふやうにうくひすも尋ねきぬへかめりなとわつらはしかる  
わかき人もありなつにならば三条の宮ふたかるかたになりぬへしとさためて四  
月ついたちころせちふんとかいふ事またしきさきにわたしたてまつり給あす  
ての日ふちつほにうへわたらせ給てふちの花のえんせさせ給ふみなみのひさし  
のみすあけていたてたりおほやけわさにてあるしの宮のつかうまつり給には  
あらずかந்தちめてん上人のきやうなとくらつかさよりつかうまつれりみきの  
おとゝあせちの大納言とう中納言左兵衛のかみみこたちは三宮ひたちの宮など  
さふらひ給みなみの庭のふちの花のもとに殿上人のさはしたりこうらう殿のひ  
んかしにかくその人ゝめしてくれ行程にそうてうにふきてうへの御あそひに  
宮の御方より御ことゝも笛などいたさせ給へはおとゝをはしめたてまつりてお  
まへにとりつゝまいり給故六条の院の御てつからかき給て入道の宮にたてまつ  
らせ給いしきんのふ二巻こえふの枝につけたるをおとゝとり給てそうし給つき  
くゝにさうの御ことひわ和こんなどすさくゑんのものともなりけり笛はかのゆ  
めにつたへしいにしへのかたみのを又なきものゝ音なりとめてさせ給ければこ  
ののりのきよらより又はいつかはえくゝしきついであらむとおほしてとう  
て給へるなめりおとゝわこん三宮ひわなととりくゝに給大将の御ふえはけふそ  
よになきねのかきりは吹たて給ける殿上人のなかにもしやうかにつきなからぬ  
ともはめしいてゝおもしろくあそぶ宮の御方よりふすくまいらせ給へりちんの  
をしきよつしたんのたかつきふちのむらこのうちしきにおりえたぬひたりしろ  
かねのやうきるりの御さかつきへいしはこんり也兵衛のかみ御まかなひつか  
うまつり給御さかつきまいり給におとゝしきりてはひんなかるへし宮たちの御

中にはわたさるへきもおはせねは大将にゆつりきこえ給をは、かり申給へと御  
気色もいかゝありけん御さか月さゝけてをしとの給へるこはつかひもてなしさ  
へれいのおほやけことなれと人に似すみゆるもけふはいとゝみなしさへそふに  
やあらむさしかへし給はりておりてふたうし給へる程いとたくひなし上らうの  
みこたち大臣などの給はり給たにめてたきことなるをこれはまして御むこにて  
もてはやされたてまつり給へる御おほえをろかならすめつらしきにかきりあれ  
はくたりたるさにかへりつき給へる程心くるしきまでそみえるあせちの大納  
言は我こそかゝるめもみんなと思しかねたのわさやと思給へりこの宮の御はゝ女  
御をそむかし心かけきこえ給へりけるをまいり給てのちも猶思はなれぬさまに  
きこえかよひ給てはては宮を得たてまつらむの心つきたりければ御うしろみの  
そむけしきもらし申れときこしめしたにつたへすなりにければいと心やま  
しと思て人からはけに契ことなめれとなそ時のみかとのことゝしきまでむこ  
かしつき給へきまたあらしかしこゝのへのうちにおはしますとのちかき程にて  
たゝ人のうちとけとふらひてはてはえんやなにやともてさはかるゝことはなと  
いみしくそしりつふやき申給れとさすかゆかしければまいりて心のうちにそ  
はらたちる給へりけるしそくさしてうたともたてまつるふんたいのもとにより  
つゝをく程のけしきはをのゝしたりかほなりけれとれいのいかにあやしけに  
ふるめきたりけんと思やれはあなかちにみなもたつねかゝすかみのまちも上ら  
うとて御くちつきともはことなることみえさめれとしるしはかりとてひとつふ  
たつそとひきゝたりしこれは大将のきみのおりて御かさしおりてまいり給へり  
けるとか

すへらきのかさしにおると藤のはなをよはぬえたに袖かけてけりうけはり  
たるそにくきや

よろつよをかけてにほはん花なれはけふをもあかぬ色とこそみれ

きみかためおれるかさしはむらさきのくもにをとらぬ花のけしきか

よのつねの色ともみえす雲るまてたちのほりたるふちなみの花これやこの

はらたつ大納言のなりけんとみゆれかたへはひかことにもやありけんかやうに  
ことなるおかしきふしもなくのみそあなりしよふくるまゝに御あそひいとおも  
しろし大殿のきみあなたうとうたひ給へる声そかきりなくめてたかりけるあせ  
ちもむかしすくれ給へりし御声のなこりなれはいまもいともゝしくてうち  
あはせたまへりみきの大殿の御七らうわらはにてさうのふえふくいとうつくし  
かりければ御そたまはすおとゝおりてふたうし給あか月ちかうなりてそかへら

せ給けるろくともかんたちめみこたちにはうへより給はす殿上人かくその人  
くには宮の御かたよりしなくに給ひけりそのよふさりなん宮まかてさせた  
てまつり給けるきしきいと心こと也うへの女房さながら御をくりつかうまつら  
せ給けるひさしの御車にてひさしなきいとけみつこかねつくりむつたゝのひら  
うけ廿あしろ二わらはしもつかへ八人つゝさふらふに又御むかへのいたし車と  
もに本所の人くのせてなんありける御をくりのかむたちめ殿上人ろくゐなど  
いふかきりなきゝよらをつくさせ給へりかくて心やすくうちとけてみたてまつ  
り給にいとおかしけにおはすさゝやかにしめやかにてこゝはとみゆる所なくお  
はすれはすくせの程くちおしからさりけりと心おこりせらるゝ物からすきにし  
かたのわすられはこそはあらめ猶まぎるゝおりなくもののみ恋しくおほゆれは  
このよにてはなくさめかねつへきわさなめり仏になりてこそはあやしくつらか  
りける契りの程をなにのむくひとあきらめて思はなれめと思つゝてらのいそぎ  
にのみ心をいれ給へりかもまつりなとさはかしき程すくしてはつかあまりの  
ほとにれいのうちへおはしたりつくらせ給みたうみ給てすへきことゝもをきて  
の給さてれいのくち木のもとをみ給へ過んか猶あはれなれはそなたさまにおは  
するに女くるまのことくしきさまにはあらぬひとつあらましきあつまおとこ  
のこしにものおへるあまたくしてしも人も数おほくたのもしけなるけしきにて  
はしよりいまわたりくるみゆる中ひたる物かなとみ給つゝ殿はまつり給て御  
せんともはまたたちはきたる程にこのくるまもこの宮をさしてくる也けりと  
みゆみすいしんともゝかやくといふをせいし給てなに人そとゝはせ給へは声  
うちゆかみたるものひたちのせんし殿のひめ君のはつせのみてらにもうてゝも  
とり給へるなりはしめもこゝになんやとり給へしと申すにおいやきゝし人なゝ  
りとおほしいてゝ人くをことかたにかくし給てはや御車いれよこゝに又人や  
とり給へときたおもてになんといはせ給御ともの人もみなかりきぬすかたにて  
ことくしからぬすかたともなれと猶けはひやしるからんわつらはしけに思て  
むまともひきさけなとしつゝかしこまりつゝそおるくるまはいれてらうのにし  
のつまにそよするこのしん殿はまたあらはにてすたれもかけすおろしこめたる  
なかのふたまにたてへたてたるさうしのあなよりのそき給御そのなれはぬきを  
きてなをしさしぬきのかきりをきてそおはするとみにもおりてあまきみにせう  
そこしてかくやむことなける人のおはするをたれそなどあないするなるへし  
君は車をそれときゝ給つるよりゆめ其人にまろありとの給なとまつくちかため  
させ給てければみなさ心得てはやうおりさせ給へまらうとはものし給へること

かたになんといひいたしたりわかき人のあるまつおりてすたれうちあくめりこ  
せんのさまよりはこのおもとなれてめやすし又をとなひたる人いまひとりおり  
てはやうといふにあやしくあらはなる心ちこそすれといふ声ほのかなれとあて  
やかにきこゆれいの御ことこなたはさきくもおろしこめてのみこそはへれ  
さては又いつこのあらはなるへきそと心をやりにいふつゝましけにおるゝをみ  
れはまつかしらつきやうたいほそやかにあてなる程はいとよくもの思いてられ  
ぬへしあふきをつとさしかくしたれはかほはみえぬほど心もなくてむねうち  
つふれつゝみ給車はたかくおるゝ所はくたりたるをこの人くはやすらかにお  
りなしつれといとくるしけにやゝみてひさしくおりてゐさりいるこきうちきに  
なてしことおほしきほそなかかなへ色のこうちきゝたり四尺のひやうふをこ  
のさうしにそへてたてたるかかみよりみゆるあなゝれはのこる所なしこなたを  
はうしろめたけに思てあなたさまにむきてそゝひふしぬるさもくるしけにおほ  
したりつるかないつみ川のふなわたりもまことにけふはいとおそろしくこそあ  
りつれこのきさらきにはみつのすくなかりしかはよかりしなりけりいてやあり  
くはあつまちおもへはいつこかおそろしからんとふたりしてくるしとも思た  
らすいひるたるにしうはをとめてひれふしたりかひなをさしいてたるかまろ  
らかにおかしけなる程もひたち殿などいふへくはみえすまことにあてなりやう  
くこしいたきまでたちすくみ給へと人のけはひせしとて猶うこかてみ給にわ  
かきひとあなかうはしやいみしきかうの香こそすれあま君のたき給にやあらむ  
おい人まことにあなめてたのものゝ香や京人は猶いとこそみやひかにいまめか  
しけれ天下にいみしきことゝおほしたりしかとあつまにてかゝるたきものゝか  
はえあはせて給はさりきかしこのあま君はすまるかくかすかにおはすれとさ  
うそくのあらまほしくにひ色あをいろうといときよらにそあるやなどほめ  
いたりあなたのすのこよりわらはきて御ゆなとまいらせ給へとておしきともも  
とりつゝきてさしいるくたものとりよせなとしてもものけ給はるこれなとおこせ  
とおきねはふたりしてくりやなとやうのものにやほろくどくふもきゝしらぬ  
こゝちにはかたはらいたくてしそき給へと又ゆかしくなりつゝ猶たちよりく  
み給これよりまさるきはの人くをきさいの宮をはしめてこゝかしこにかたち  
よきも心あてなるもこゝらあくまてみあつめ給へとおほろけならてはめも心も  
とまらずあまり人にもとかるゝまてものし給心ちにたゝいまはなにはかりすく  
れてみゆることもなき人なれとかくたちさりかたくあなかにゆかしきもいと  
あやしき心なりあま君はこのとのゝ御かたにも御せうそこきこえいたしたりけ

れと御心ちなやましとていまの程うちやすませ給へるなりと御ともの人く心  
しらひていひたりければこの君を尋まほしけにの給しかはかゝるついでにもの  
いひふれんとおもほすによりてひくらし給にやと思てかくのそき給覧とはしら  
すれいのみさうのあつかりとものまいれるわりこやなにやとこなたにもいれた  
るをあつま人ともにもくはせなとことゝもをこなひをきてうちけさうしてまら  
うとのかたにきたりほめつるさうそくけにいとかはらかにてみめも猶よしく  
しくきよけにそあるきのふおはしつきなんとまちきこえさせしをなとかけふも  
日たけてはといふめれはこのおい人いとあやしくるしけにのみせさせ給へは  
昨日はこのいつみ川のわたりにてけさもむこに御心ちためらひてなんといらへ  
ておこせはいまそおきゐたるあま君をはちらひてそはみたるかたはらめこれよ  
りはいとよくみゆまことにいとよしあるまみのほとかさしのわたりかれをも  
くはしくつくくとしもみ給はさりし御かほなれとこれをみるにつけてたゝそ  
れと思ひいてらるゝにれいの涙おちぬあま君のいらへ打する声けはひ宮の御方  
にもいとよく似たりときこゆあはれなりける人かなかゝりけるものを今まで尋  
もしらてすくしけることよこれよりくちおしからんきはのしなゝ覧ゆかりなど  
にてたにかはかりかよひきこえたらん人を得てはをろかに思ふましき心ちする  
にましてこれはしられたてまつらさりけれとまことにこ宮の御こにこそはあり  
けれとみなし給てはかきりなくあはれにうれしくおほえ給たゝいまもはひより  
てよの中におはしけるものをといひなくさめまほしほうらいまで尋てかんさし  
のかきりをつたへてみ給けんみかとは猶いふせかりけんこれはこと人なれとな  
くさめ所ありぬへきさまなりとおほゆるはこの人に契りのおはしけるにやあら  
むあま君はものかたりすこしゝてとくいぬ人のとかめつるかほりをちかくの  
そき給なめりと心えてければうちとけこともかたはすなりぬるなるへし曰く  
れもていけは君もやをらいてゝ御そなとき給てそれいめし出るさうしのくちに  
あま君よひてありさまなどゝひ給おりしもうれしくまであひたるをいかにそか  
の聞えしことはとの給へはしかおほせこと侍し後はさるへきついて侍らはと侍  
侍しにこそはすきてこの二月になんはつせまうてのたよりにたいめんして侍し  
かのはゝ君におほしめしたるさまはほめかし侍しかはいとかたはらいたくか  
たしけなき御よそへにこそは侍なれなとなど侍しかとその比ほひはのとやかに  
もおはしまさすとうけ給はりしおりひんなく思ひ給へつゝみてかくなんともき  
こえさせ侍らさりしをまたこの月にもまうてゝけふかへり給なめりゆきかへり  
のなかやとりにはかくむつひらるゝもたゝすきにし御けはひを尋きこゆるゆへ

になんはへめるかは、君もさはる事ありてこのたひはひとりものし給めれは  
かくおはしますともなにかはものし侍らんとてときこゆる中ひたる人ともにし  
のひやつれたるありきもみえしとてくちかためつれといか、あらむけすともは  
かくれあらしかしさていか、すへきひとりものすらんこそなか／＼心やすかな  
れかく契ふかくてなんまいりきあひたるとつたへ給へかしの給へはうちつけ  
にいつの程なる御ちきりにかはどうちわらひてさらはしかつたへ侍らんとてい  
るに

かほとりの声も聞しにかよふやとしけみをわけてけふそたつぬるたゝくち  
すさみのやうにの給ふをいりてかたりけり